

福岡市埋蔵文化財調査報告書第409集

中南部（4）

—那珂遺跡群第26次、麦野A遺跡群第3次、雜餉隈遺跡群第2～4次調査報告—

1995

福岡市教育委員会

福岡市埋蔵文化財調査報告書第409集

中南部（4）

—那珂遺跡群第26次、麦野A遺跡群第3次、雜餉隈遺跡群第2～4次調査報告—

1995

福岡市教育委員会

序文

「活力あるアジアの拠点都市」を目指して都市づくりを進めている福岡市は、古くから我が国と大陸との主要な交流の窓口でした。その中でも福岡平野は、弥生時代には「漢委奴国王」の金印にある「奴国」が存在し、その後も対外交渉の拠点として重要な位置にあり、数々の貴重な遺跡が残されています。

しかし、近年の福岡市の著しい都市化により、それらが次第に失われつつあります。福岡市教育委員会ではそれらの開発によって失われていく遺跡については、事前に発掘調査を行い、記録の保存に努めています。

今回報告する那珂遺跡群は「奴国」のもっとも重要な拠点集落でもあり、これまで50次の調査が実施され、数多くの貴重な遺構、遺物が発見されました。また、麦野A遺跡群、雑餉隈遺跡群は奈良・平安時代の井戸、竪穴住居跡が発見され、古代の集落跡が存在することが分かりました。

本書が市民の皆様の埋蔵文化財保護への理解と認識の助けになり、また、研究資料としてご活用頂ければ幸いです。

最後に調査にご協力を頂いた川辺タミエ様、武内善朗様、関道房様、中川宗敏様、ポリマー産業有限会社様をはじめとする方々には厚くお礼申し上げます。

平成7年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 尾花剛

例　　言

1. 本書は福岡市中南部で行われた民間開発に伴い、福岡市教育委員会が国庫補助を得て調査を実施した、那珂遺跡群第26次、麦野A遺跡群第3次、雜須隈遺跡群第2～4次調査の報告書である。
2. 本書に使用した遺構の実測は山口謙治、荒牧宏行、菅波正人、林田憲三、山口朱美が、遺物の実測図は荒牧、菅波、中暢子が行った。製図は荒牧、菅波、山口、中、井上が行った。
3. 本書に使用した遺構、遺物の写真は荒牧、菅波が撮影した。
4. 本報告書の作成にあたっては石津玲子、岩崎加奈子、中願寺希、佐々木涼子、藤信子、品川伊津子、井上加代子、坂井美穂の協力を得た。
5. 遺構略号は掘立柱建物→SB、竪穴住居跡→SC、溝→SD、井戸→SE、土坑→SK、柱穴→SPとした。
6. 本書に使用した方位は磁北である。
7. 本書の執筆は第2章は荒牧、それ以外は菅波が行った。編集は山口、荒牧と協議して、菅波が行った。
8. 本報告に係わる図面、写真、遺物はすべて福岡市埋蔵文化財センターに収蔵、保管される予定である。

本文目次

第1章 はじめに.....	1
1. 調査に至る経緯.....	1
2. 調査の組織.....	1
第2章 那珂遺跡群第26次調査の記録.....	3
1. 調査の概要.....	3
2. 略序.....	3
3. 垂穴式住居跡(SC)	6
4. 土壙(SK)	11
5. 挖立柱建物(SB)	12
6. 井戸(SE)	12
7. 溝(SD)	17
8. 小結.....	24
第3章 芦野A遺跡群第3調査の記録.....	27
1. 調査の概要.....	27
2. 位置と環境.....	27
3. 調査の記録.....	28
1) 井戸(SE)	28
4. 小結.....	34
第4章 雜餉隈遺跡群第2次調査の記録.....	35
1. 調査の概要.....	35
2. 位置と環境.....	35
3. 調査の記録.....	36
1) 垂穴住居跡(SC)	36
2) 土坑(SK)	38
4. 小結.....	41
第5章 雜餉隈遺跡群第3次調査の記録.....	49
1. 調査の概要.....	49
2. 調査の記録.....	49
1) 垂穴住居跡(SC)	49
3. 小結.....	52
第6章 雜餉隈遺跡群第4次調査の記録.....	57
1. 調査の概要.....	57
2. 調査の記録.....	57
1) 挖立柱建物(SB)	57
2) 土坑(SK)	58
3. 小結.....	60

挿図目次

Fig. 1 福岡平野の主な遺跡(1/50000)	2
Fig. 2 那珂26次調査地点と周辺調査地点(1/5000)	3
Fig. 3 那珂26次、33次遺構配置図(1/200)	4
Fig. 4 遺構完掘状況(全景、南から)	5
Fig. 5 遺構完掘状況(東半部、南から)	5
Fig. 6 SC01実測図(1/60)	6
Fig. 7 SC01完掘状況(南から)	6
Fig. 8 SC02完掘状況(南東から)	6
Fig. 9 SC02実測図(1/60)	7
Fig. 10 SC02出土遺物実測図(1/4)	7
Fig. 11 SC05実測図(1/60)	8
Fig. 12 SC05完掘状況(南から)	8
Fig. 13 SC05内炉跡、土壙実測図(1/40)	9
Fig. 14 SC05内炉跡	9
Fig. 15 SC05内土壙	9
Fig. 16 SC05出土遺物実測図(1/3、1/4)	10
Fig. 17 SC07実測図(1/60)	10
Fig. 18 SK04完掘状況(南から)	11
Fig. 19 SK04実測図(1/40)	11
Fig. 20 SK04出土遺物実測図(1/4)	11
Fig. 21 SB06実測図(1/60)	12
Fig. 21 SB06完掘状況(南東から)	12
Fig. 22 SE08完掘、遺物出土状況	13
Fig. 23 SE08実測図(1/80)	13

Fig. 24	SE08出土遺物実測図 1 (1/4)	14
Fig. 25	SE08出土遺物実測図 2 (1/4、1/6)	15
Fig. 26	SE08出土鉄器実測図 (1/2)	15
Fig. 27	SD01土層断面図 (1/60)	16
Fig. 28	SD01完掘状況 (南から)	17
Fig. 29	SD01上層断面 (調査区南壁面、北から)	17
Fig. 30	SD01下層断面 (調査区北壁面、南から)	17
Fig. 31	SD01出土遺物実測図1 (1/4)	18
Fig. 32	SD01出土遺物実測図2 (1/4)	19
Fig. 33	SD01出土瓦片実測図 (1/4)	20
Fig. 34	SD01出土石器実測図 (1/3)	20
Fig. 35	SD02土層断面図 (1/60)	21
Fig. 36	SD02完掘状況 (南東から)	21
Fig. 37	SD02土層断面 (北西から)	21
Fig. 38	SD02出土遺物実測図 (1/3、1/4)	22
Fig. 39	SP69出土遺物実測図 (1/3)	23
Fig. 40	那珂26次出土遺物 1	25
Fig. 41	那珂26次出土遺物 2	26
Fig. 42	麦野A 遺跡群第3次調査地点位置図 (1/2500)	27
Fig. 43	麦野A 遺跡群と周辺遺跡 (1/6000)	28
Fig. 44	麦野A 遺跡群第3次調査遺構配置図 (1/100)	29
Fig. 45	SE-001、002遺構実測図 (1/60)	30
Fig. 46	SE-001及び002出土遺物実測図 (1/3)	31
Fig. 47	SE-002出土遺物実測図 (2) (1/3)	32
Fig. 48	SE-002出土遺物実測図 (3) (1/3)	33
Fig. 49	麦野A 遺跡群第3次調査地点全景 (東から)	34
Fig. 50	雜餉隈遺跡群第2次調査地点位置図 (1/2500)	35
Fig. 51	雜餉隈遺跡群と周辺遺跡 (1/6000)	36
Fig. 52	雜餉隈遺跡群第2次、3次調査遺構配置図 (1/300)	37
Fig. 53	雜餉隈遺跡群第2次調査遺構配置図 (1/200)	38
Fig. 54	SC-003~006、011遺構実測図 (1/60)	39
Fig. 55	SC-003~006出土遺物実測図 (1/3、1/2)	40
Fig. 56	SK-001、002遺構実測図 (1/40)	41
Fig. 57	SK-001、002出土遺物実測図 (1/3)	42
Fig. 58	雜餉隈遺跡群第2次調査地点全景 (東から)	43
Fig. 59	SC-003完掘 (東から)	44
Fig. 60	SC-003竪 (南から)	44
Fig. 61	SC-004完掘 (東から)	45
Fig. 62	SC-004竪 (南から)	45
Fig. 63	SC-005完掘 (東から)	46
Fig. 64	SC-005竪 (南から)	46
Fig. 65	SC-006完掘 (南から)	47
Fig. 66	SC-006竪 (西から)	47
Fig. 67	SK-002完掘 (南から)	48
Fig. 68	SK-001完掘 (西から)	48
Fig. 69	雜餉隈遺跡群第3次調査地点位置図 (1/2500)	49
Fig. 70	雜餉隈遺跡群第3次調査遺構配置図 (1/200)	50
Fig. 71	SC-001~004遺構実測図 (1/60) 及び遺物実測図 (1/3、1/2)	51
Fig. 72	雜餉隈遺跡群第3次調査地点全景 (北から)	52
Fig. 73	SC-001完掘 (南から)	53
Fig. 74	SC-001遺物出土状況 (南から)	53
Fig. 75	SC-002完掘 (北から)	54
Fig. 76	SC-002遺物出土状況 (北から)	54
Fig. 77	SC-003、004完掘 (北から)	55
Fig. 78	SC-003完掘 (東から)	55
Fig. 79	SC-004完掘 (北から)	56
Fig. 80	SC-001出土墨書き土器	56
Fig. 81	雜餉隈遺跡群第4次調査地点位置図 (1/2500)	57
Fig. 82	雜餉隈遺跡群第4次調査遺構配置図 (1/100)	58
Fig. 83	SB-003、004遺構実測図 (1/100)	59
Fig. 84	SK-001遺構実測図 (1/40)	59
Fig. 85	SK-001遺物実測図 (1/3)	60
Fig. 86	雜餉隈遺跡群第4次調査地点全景 (東から)	61
Fig. 87	雜餉隈遺跡群第4次調査地点全景 (東から)	61
Fig. 88	SK-001完掘 (西から)	62
Fig. 89	雜餉隈遺跡群第5次調査地点全景 (東から)	62

第1章 はじめに

1. 調査に至る経緯

福岡市の中南部に位置する福岡平野は南北に延びる洪積丘陵と沖積平野からなり、北は博多湾に面し、東から南にかけて三郡、背振山塊に囲まれる。平野内には東から多々良川、御笠川、那珂川、樋井川、室見川が貫流し、それぞれの河川に開析された丘陵や段丘によって画された小平野が形成される。平野内にはこの地域が古くから大陸の門戸として役割を果たしていたことが伺える様々な遺跡が発見されている。しかし、その一方で平野内の開発は顕著で、相次ぐビル建築で日々町並みは変化している。埋蔵文化財課では遺跡内及びその周辺で開発計画が上がる試掘調査を実施し、各地点の状況の把握を努めている。その上で、地権者と遺跡保全のための設計変更等の協議を持つ。しかし、建物の構造上、地下の遺構に影響を及ぼす場合、地権者との協議の上、記録保存のための調査を実施している。本書には福岡市中南部で行われた那珂遺跡群第26次、麦野A 遺跡群第3次、雜飼限遺跡群第2～4次調査地点の報告を掲載する。

2. 調査の組織

調査は以下に示す組織構成で実施した。調査にあたって、川辺タミエ様、武内善朗様、関道房様、中川宗敏様、ポリマー産業有限会社様には調査費用をはじめとして、条件整備等で多大なるご協力を頂いた。また、調査中は周辺の住民の皆様にご理解、ご協力を頂き、円滑に調査を行うことができた。ここに記して謝意を表する。

調査委託	那珂第26次－川辺タミエ、麦野A第3次－武内善朗、雜飼限第2次－関道房 雜飼限第3次－中川宗敏、雜飼限第4次－ポリマー産業有限会社
調査主体	福岡市教育委員会 教育長 井口雄哉(前任)、尾花剛 文化財部長 花田兎…(前任)、後藤直 埋蔵文化財課長 柳田純孝(前任)、折尾学 埋蔵文化財第二係長 柳沢一男(前任)、山崎純男
調査庶務	埋蔵文化財第一係 松延好文、中山昭則(前任)、内野保基
調査担当	荒牧宏行(那珂第26次)、山口讓治、菅波正人(麦野A第3次)、雜飼限第2～4次)
調査・整理	林田憲三、山口朱美、石津玲子、岩崎加奈子、佐々木涼子、中願寺希、藤信子、 中暢子、品川伊津子、井上加代子、坂井美穂

調査地点	那珂遺跡群第26次調査	麦野A遺跡群第3次調査	雜飼限遺跡群第2次調査	雜飼限遺跡群第3次調査	雜飼限遺跡群第4次調査
調査番号	9002 NAK26	9316 MGA3	9324 ZSK2	9349 ZSK3	9367 ZSK4
地図番号	38-A-3	12-A-2	13-A-2	13-A-2	13-A-2
調査地	博多区那珂2丁目249	博多区麦野1丁目27-3、5	博多区西春町1丁目17-27	博多区西春町1丁目18	博多区新和町2丁目13
開発面積	1028m ²	228m ²	559m ²	238m ²	140m ²
調査面積	436m ²	134m ²	345m ²	156m ²	105m ²
調査期間	1990.04.10～06.16	1993.06.16～06.24	1993.07.19～08.06	1993.11.18～12.04	1994.03.09～03.24



Fig. 1 福岡平野の主な遺跡(1/50000)

- | | | | | |
|-----------|--------------------|-------------|---------------|-------------|
| 1. 鶴見遺跡群 | 6. 北東遺跡群 | 11. 斎古遺跡 | 16. 薩波山田遺跡 | 21. 竹野遺跡群 |
| 2. 鶴見城 | 7. 佐野遺跡群 | 12. 五ト川高木遺跡 | 17. 須恵西手遺跡 | 22. 伊賀川北遺跡群 |
| 3. 豊前高木遺跡 | 8. 明治原リサ遺跡、那珂村牛込遺跡 | 13. 仲尾遺跡群 | 18. 近丸P.T.井遺跡 | 23. 井原山田遺跡群 |
| 4. 鶴見遺跡群 | 9. 佐竹遺跡 | 14. 丹生遺跡群 | 19. 中手子遺跡 | 24. 大野高木遺跡 |
| 5. 甘草遺跡群 | 10. 道野遺跡 | 15. 清野遺跡群 | 20. 二毛城今 | 25. 四八幡遺跡群 |
| | | | | 27. 岐阜高木遺跡群 |

那珂遺跡群第26次調査報告

第2章 那珂遺跡群第26次調査の記録

1. 調査の概要

本調査地点は昨年、刊行した第33次調査区と同一敷地内で隣接している。立地等についての詳細は、「那珂遺跡9」に記載したので、ここでは既往の調査と、本調査の概略を記す。

第26次調査地点は那珂遺跡の南部に位置し、最近、調査例も増えつつある。地形は概ね南側へ下降していき、南西約180m離れた第22次調査地点では、ローム下部の八女粘土が埋没してゆき、洪積台地と沖積地との境近くとなる。

周辺の検出された遺構は、弥生時代中期後半から後期、古墳時代後期の堅穴式住居跡が主体を占めるが、第41次の旧石器の分布、第37次調査の夜臼期の環濠、古代では、第22、23次の初期瓦の出土、同じく第23次で検出された、南北方向の溝と並び倉等注目されるものがある。

本調査では弥生時代後期の堅穴式住居跡群と古代の大溝 SD01、中世末のSD02の発掘作業を中心とした。これらの詳しい時期、内容は後述するが、第20次と23次調査で検出された弥生時代中期末の環濠が北側約30mに略東西に走行する事が推定され、南東約60mの第41次では後期の環濠と思われる溝が検出され集落の変遷が留意される。また、古代においては周辺の調査で官衙的施設が想定されるなか、南北に走行するSD01の関連を詰めていく必要がある。

2. 層序

畑の耕作土を含めた灰褐色土(層厚約20cm)を除去すると地山の赤褐色粘土(鳥栖ローム)に達する。(Fig. 27) 地山の標高は11m前後で調査区内において比高差はみられない。

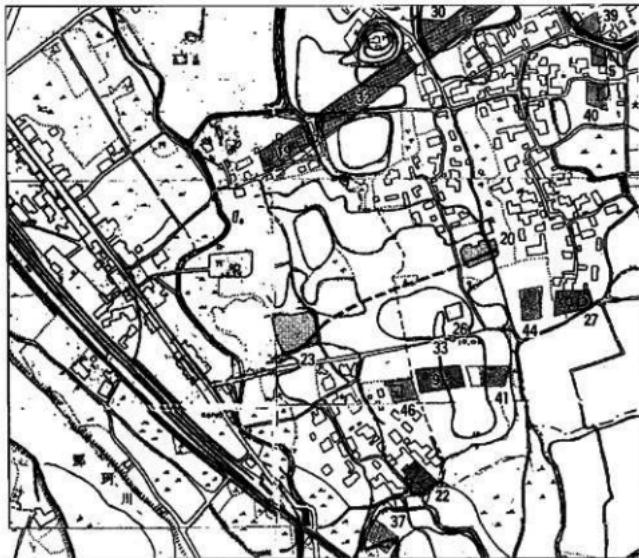




Fig. 3 那河26次、33次遺構配置図(1/200)



Fig. 4 遺構完掘状況(全景、南から)



Fig. 5 遺構完掘状況(東半部、南から)

3. 壁穴式住居跡 (SC)

4棟が検出された。南東部にはみられないが、壁溝や貼床土が断片的に残るため、削平を受け消滅したものが多いと考えられる。

SC01

調査区北東隅に位置し大半が調査区外に在す。南辺3.25m、遺存が良い北側で壁高15cmを測る。壁溝は検出が極めて不明瞭で、浅く断続的に巡るのが確認された。南東部のプランの歪みは床面の汚れを示すものにすぎず、本来南へさらに張りだすものと考えられる。ベッド状造構が床面から6cmの高さで設けられている。東側は削平で不明確であるが、南西部に限られて設置されるものと判断された。遺物は細片のみ少量出土で図示できない。

SC02

調査区北東隅で検出された。短軸長3.30m、長軸長3.75mを測り、方形に近いプランを呈すが、東辺が短く歪んでいる。壁高15cmが残り、壁溝は幅8cm、深さ4cmでP₆の周辺と南辺の東寄り大半にはみられない。北辺側に幅1.2m、高さ4cmのベッド状造構が設置される。ベッドの配置上、炉が南辺寄りに据えられている。比較的広い掘り方で、深さ10cmの浅皿状をなす。支柱穴はP₁、P₂が考えられるが、P₂は浅く、炉に近い為、疑問が残る。P₃、P₄のラインは東寄りであるが主軸に沿う事からP₁、P₂との組合せも考えられる。なお、P₁、P₃、P₄は床面を検出した段階では判別できず、層厚約6cmの地山の汚れ(貼床土か)を除去して検出された。P₅は長軸長100cm、短軸長60cmで隅丸の長方形プランをなし、東壁に接して配置されている。深さは30cm程で基底面には起伏はみられない。壁際に土器と石が散乱するが、基底から浮いた状態である。P₅付近に土器が集中し、床面

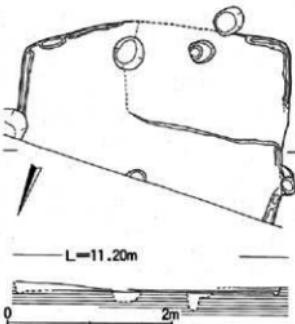


Fig. 6 SC01実測図 (1/60)



Fig. 7 SC01実掘状況 (南から)



Fig. 8 SC02実掘状況 (南東から)

を下げる下部に深さ23cmの窪みがあることが確認された。

出土遺物（1～9）

1は袋状口縁で外面の袋状の屈曲は微弱であるが内面は押し潰された様に鋭く折れる。2は手捏土器である。3はP₆内の東壁寄りから出土した。外面は袋状口縁の上位に横方向のハケ目、以下縱方向のハケ目を明瞭に残す。内面は袋状口縁の強い屈曲をヨコナデで施し、頸部から胴部へ移行部分に指頭痕がみられる。以下横方向にヘラケズりを施し、工具を当てた痕が湾曲して残る。4の袋状口縁は3の近くから出土した袋状口縁である。内湾する屈曲は内外両面ともに滑らかである。5はベッド落ち際のP₅付近から出土した。頸部の付根に突帯が巡るが先端部分が欠落している。外面は器面が剥落しているため調整不明。内面は頸部から胴部へ移行する屈曲部位まで指頭痕を残し、胴部はナデ調整で滑らかに仕上げる。6は炉内に基底面から8cm程浮いた状態で出土した。外面底部が火熱により赤変し、器体は脆い。7はP₂近くの床面から出土。底部は接合面から剥落している。8は埋土中から出土。やや内湾して胴部へ延びる。9はP₅上から出土。外面はナデ調整でハケ目は残らない。

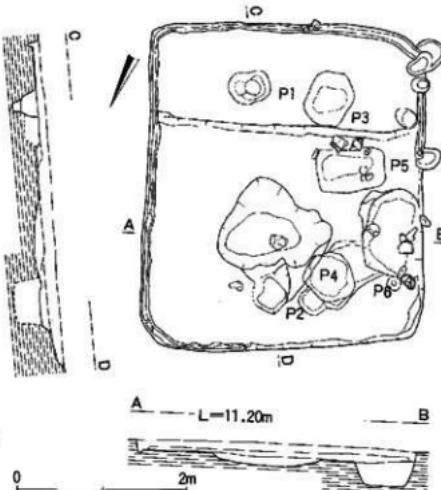


Fig. 9 SC02実測図(1/60)

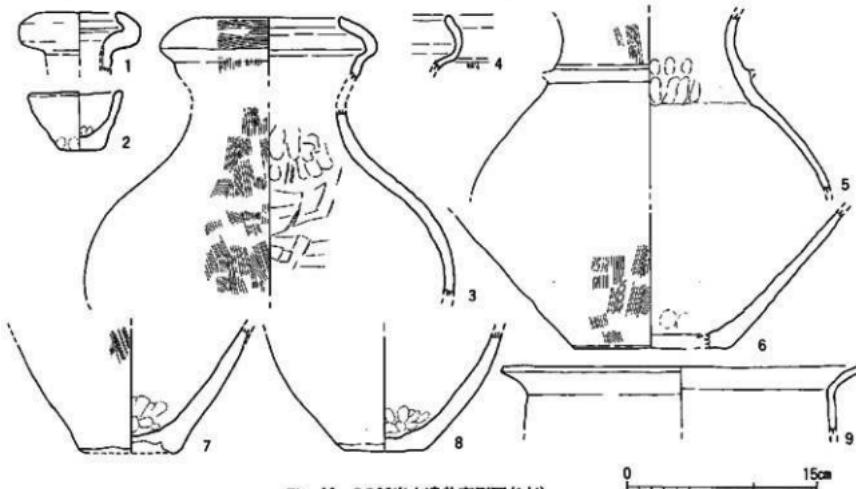


Fig. 10 SC02出土遺物実測図(1/4)

SC05

調査区中央北側で検出された。長軸長6.10m、短軸長3.95mを測る大形の方形プランである。壁高15cmが遺存し、周溝は幅9cm、深さ6cmで巡るが、ベッド以東では検出されなかった。ベッド状造構が両短辺の東寄り半分に設置されている。幅1.3m、床面からの高さ5cmで南辺側ではローム混じりの黒色土を貼りつけて成形している。北東隅の張り出しは当初、張り出し部の基底面とベッドのレベルが変わらず、竪穴住居に付随する施設と思われたが、東側で検出されたSK04と同じ規模で並列する事から別造構が切り合うものである。しかし、南東隅はベッドの延長方向に張りだしている。主柱穴はP₁、P₂が考えられ、その延長方向のP₈は深さ50cmで柱を支えるには耐えるが、P₆、P₇は浅すぎる。

炉跡P₄はP₁—P₂のラインから東壁よりに置かれる。長軸長90cm、短軸70cmの楕円形プランで、西側では2段落ちの形状をなす。深さ30cmを掘窪め、下層に縋まりがない黒色土混じりのロームがつまる。その上層に焼土、炭層がレンズ状に

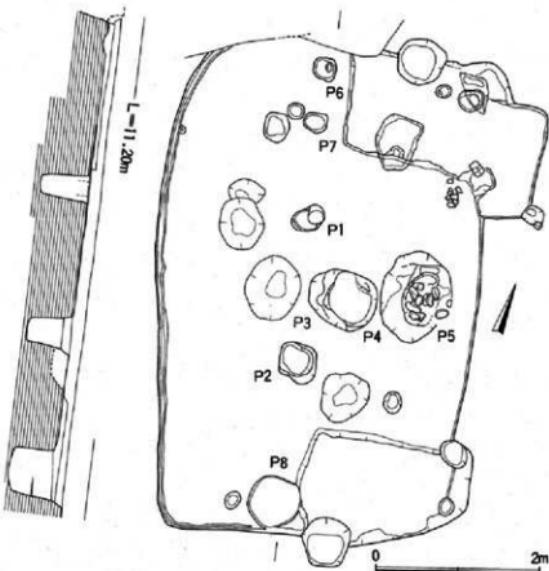


Fig. 11 SC05実測図 (1/60)

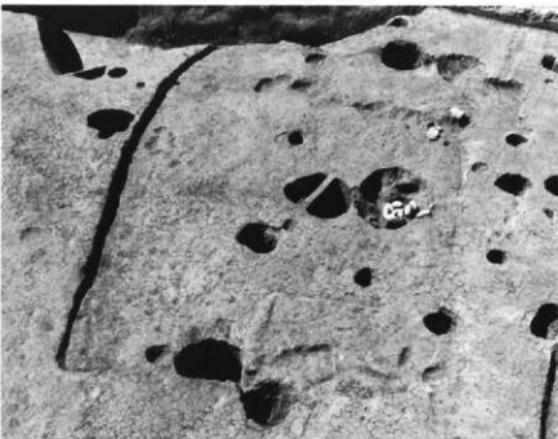


Fig. 12 SC05実測状況 (南から)

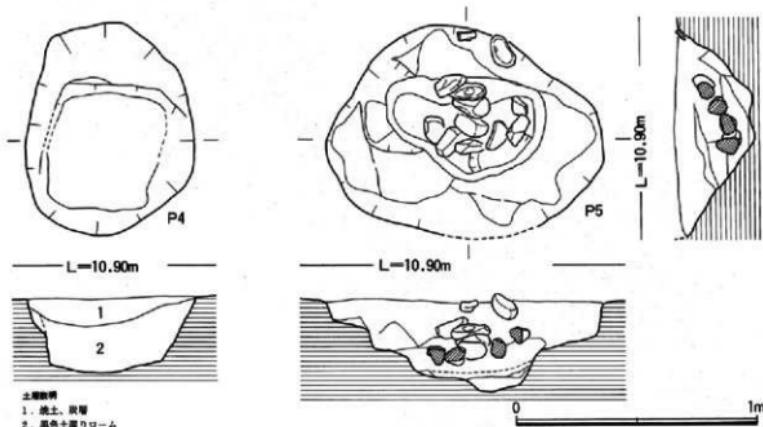


Fig. 13 SC05内炉跡、土壤実測図(1/40)

堆積する。

炉跡の東側に接するようにP₅が検出された。上面は長軸長110cm、短軸長86cmの歪な楕円形を呈し、基底面にかけては起伏の多い不整形状をなす。中央には拳大の円窓が多い集石がみられた。集石の中央は東側(堅穴部外)へ重なるように上がり、下部の両脇にも出土した。梯子等を固定したものか。

炉跡を中心P₅と対照してP₃が検出された。上部は炉跡から掻きだされた炭が覆い、床面を少し下げて判別した。深さは30cm。

出土遺物

10は北側ベッドの落ち際で出土した。外面の縦ハケは器面が剥落しているため不鮮明であるが、本来、細かいハケ目を残す。11は埋土中から出土。底部中心にかけて器肉が薄くなる。器面が摩滅し内外面の調整が不明瞭。12も埋土中より出土。外面は粗いものと磨耗した細かい2種類の縦ハケが器面が残る部分に明瞭にみられる。内面には横方向の粗いハケ目が部分的にのこる。全体の4/5程が遺存し、口径13.4cm、器高13.7cmを測る。13は灰色を呈す安山岩製の石包丁である。背はわずかに山形になる。14は形状から紡錘車未製品と思



Fig. 14 SC05内炉跡



Fig. 15 SC05内土壤

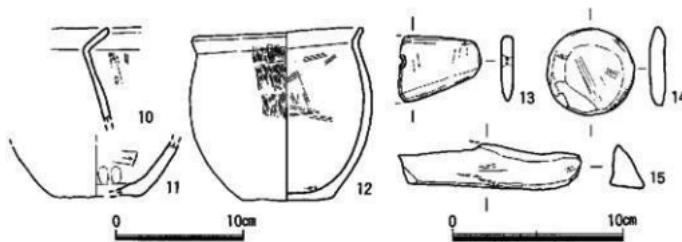


Fig. 16 SC05出土遺物実測図 (13~15は1/3、他は1/4)

われ穿孔はない。滑石製で径5cmの円盤状に研磨され、周縁を先細りに仕上げる段階まで行なっている。15は堆積岩製の砥石で仕上げ用であろう。全面、砥ぎこまれ、断面三角形を呈す。

SC07

調査区中央部で検出された。SD01、02に切られ、大部分が消失している。壁も削平を受け、幅12cm、深さ6cmの壁溝のみが遺存する。中央部に範囲は狭いが焼土が検出された。主柱穴は不明確であるがSP69か。出土遺物は皆無に近いがSP69出土滑石製品を章末 Fig. 39に示す。

その他

調査区の南西部には堅穴住居跡の壁は見いだせないが、壁溝や貼床土と思われる地山の汚れが検出された。なお、南北に平行する溝は畑の歓である。

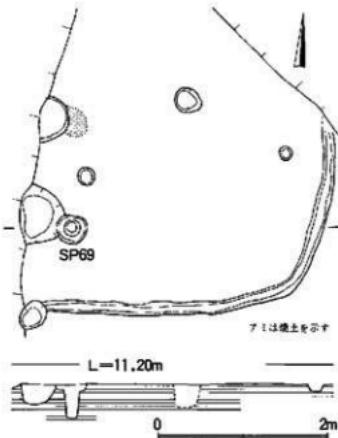


Fig. 17 SC07実測図 (1/60)

4. 土壙 (SK)

SK04

調査区中央北側で検出された。長辺2.10m、短辺1.50mの長方形プランを呈す。深さは6cm程で他の堅穴住居跡の遺存を考慮すれば相応の削平を受けているものと考えられる。基底部は平坦ではなく水平である。北東隅の不整形の窪みは上面での切り合いは判らず、基底面で検出された。

出土遺物

16は弥生中期の甕口縁部である。17の甕口縁は端部が肥厚する。外面遺存する頸部下までヨコナデ、内面頸部はナデ調整。18の口縁部は「く」の字に近い角度で折れ、頸部下に口縁部成形時のヨコナデによる凹みがみられる。19は西辺よりの基底面から出土。平坦な外底部から外反しながら胴部へのびる。20は中央基底面から出土。「く」の字に折れた頸部に断面三角形の突帯を貼りつけ口縁部は内湾してのびていき端部は丸く收める。内面の頸部屈曲は強いヨコナデにより突出する。外面の胴部調整は器面が剥落し不明だが、内面はナデ調整。口径39.2cmを測る。

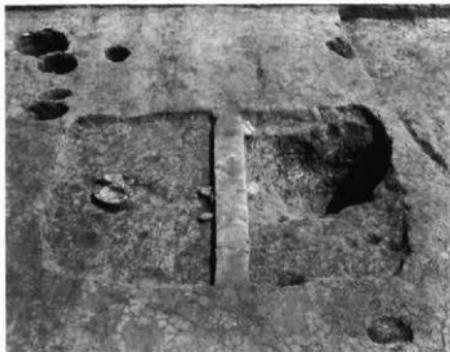


Fig. 18 SK04発掘状況(南から)

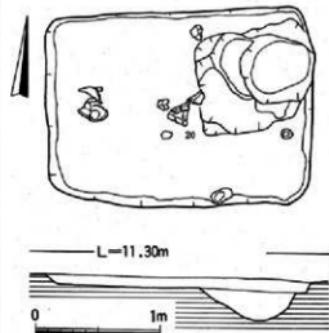


Fig. 19 SK04実測図(1/40)

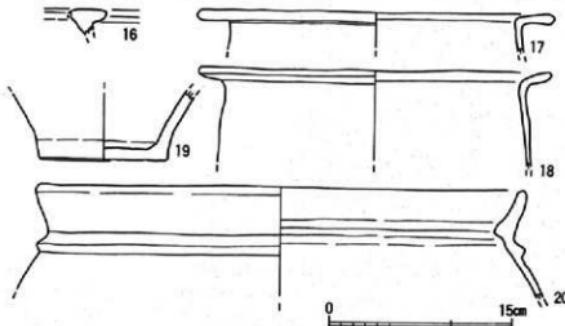


Fig. 20 SK04出土遺物実測図(1/4)

5. 掘立柱建物 (SB)

SB06

調査区の南東部で検出された。梁行240cm、桁行は西側で300cm、東側は長く330cmを測る1×2間の規模である。主軸方向は真北から20°西にふれ、堅穴住居とはほぼ同じくする。柱穴は径40cm、深さ35~45cmを測り、均等である。底面のレベルがやや南側へ下がっていくのは地形に応じたものであろう。

柱間を連結した地中梁を埋めたと考えられる溝が幅15~20cm、深さが柱穴の基底面より浅く20cm程度掘込まれている。東側柱筋は間柱が外へ張りだすため、この溝も屈曲したラインになる。北側梁行筋に浅い溝と小柱穴が検出されたが、堅穴住居の壁溝の可能性が高い。

出土遺物は須恵器を含まず、弥生土器片が多い。

6. 井戸 (SE)

SE08

調査区中央でSD02に切られて検出された。上面では径2.3mの楕円形プランを呈し、地山が下層の灰白色粘土（八女粘土）に変わり円形の掘り方となる。この地山の

層境で掘り方に段がつくが、上部が崩落した為に生じたものと考えられる。底面は径1.3mの円形で、水しぶきで位の灰白色粘土中でおさまり、砂層まで達しなかった。

祭祀に伴うと考えられる遺物が検出面近くの上位で器台の完形品（28）、地山の層が変わる中位に、支脚、器台の完形品（22、23、26）、最下底で器台の完形（27）、壺の完形（37）、口縁部を欠いた壺（35）、4/5程が遺存する大形の壺（44）が出土した。

出土遺物

検出面近くの上位から28、31、32、41、45、中位から21~24、26、33、38、39、42、下位から25、29、30、36、40、43、底面から27、34、35、37、44が出土。器台に完形品が多く22、23、26~30が含まれる。

21は3/4程が遺存する。やや丸みがある底部から直に胴部は立ち上がる小形楕の器形をなす。外面胴部はナデを施すが指頭痕は目立たず、わずかにハケ目を残す部分がある。黄褐色を呈し、硬質である。22の支脚外面は板状の工具を当てた痕が多く残る。内面は縱方向にナデ通した痕が明瞭に残り、上面の孔から指で押した粘土が被覆している箇所がある。23の支脚は径2.5cmの棒状支え部を貼りつけている。調整、色調等は22と近似する。上面の孔から親指で押した程度の粘土が内面上部にナデつけられ

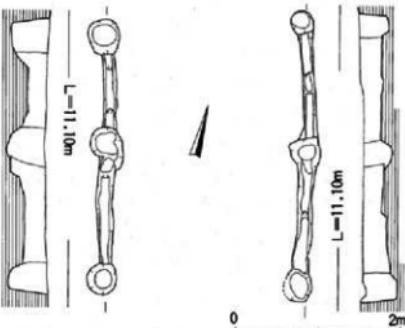


Fig. 21 SB06実測図(1/60)



Fig. 21 SB06発掘状況(南東から)

れて被覆するのも同様である。24の外面には縦方向の稜が走り、下位に板状工具を当てた痕が残る。内面下位にも工具を当てた痕がみられる。体部は外側中位に最も厚く粘土を貼りつけて肥厚させる。25は外面に粗い縦ハケ、内面は上位に粗い横方向のハケ、下位に細かい右上がりのハケ目を残す。欠損する下位は打ち欠いた可能性がある。26の外面は上位に絞り込むような強いナデ、下位には板状の工具を当てた痕跡が随所に残す。内面は縦方向の強いナデを裾まで通す。27は体部が細身で、器形に歪みを生じ、調整、胎土も含め粗雑な作りである。外面にはナデ痕跡を明瞭に残し、裾は強くナデ押されて広げている。胎土に大きめの白色砂粒を多く含む。28の外面には上から下へ板状工具を当てた痕跡が各所に残る。この痕跡は内面口縁部と裾部にも右回り横方向にみられる。29は外面くびれ以下に板状工具を当てた痕跡が残る。内面口縁部にわずかにハケ目が、脚裾には右回り横方向に板状工具を当てた痕が残る。脚裾端部は水平な平坦面をなす。30は29とともに他の器台に比べ均整のとれた器形、丁寧な調整、赤みを帯びた色調、焼成等類似する。口縁が開口していく付根の位置を爪で内外面押さえ、引き搔いたような横線が回る。外面体部と内面口縁部には板状工具の痕跡が一部残るが大半ナデ消される。31は半分程が遺存する。口縁と脚裾の径がほぼ変わらず、器厚が中位に特に肥厚している特徴がある。外面のくびれ付近と脚裾近くにハケ目を残す。内面口縁部と脚裾に横ハケを残し、体部は粘土が絞りよじれた皺が顕著である。32、33は同一個体と思われる。ともに肥厚し、ナデ押された指頭痕が顕著である。内面に粘土の皺状の亀裂が多くみられる。32は口縁端部を水平な平坦面に成形し、33の体部外面のナデは絞り込むように施す。34は図示した部位の1/3周が遺存する。外面肩部以下に粗い縦ハケ目を、内面肩部から屈曲する位置までナデ痕残す。内面体部に爪状痕が多くみられる。外面肩部に黒斑有す。35は口縁部を欠く他は完存する。外面は器面が剥落している為、不明瞭となっているが、本来、全面にハケ目を残していたものと考えられる。中位には左上がりの斜めから横方向のハケ目が多くみられる。内面は肩部付近にナデを施し、以下外面のハケ目と異なった粗いハケ目を明瞭に残している。外面淡赤褐色、内面黒灰色を呈す。36の外面にはナデ消されなかつた縦ハケが部分的に残る。底部は突出し、わずかに丸みをもつ。37は縦ハケ後ナデ調整。内面はナデ調整であるが、沈線状の刷痕



Fig. 22 SE08完掘、遺物出土状況

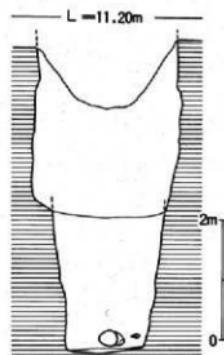
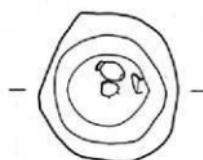


Fig. 23 SE08実測図(1/80)

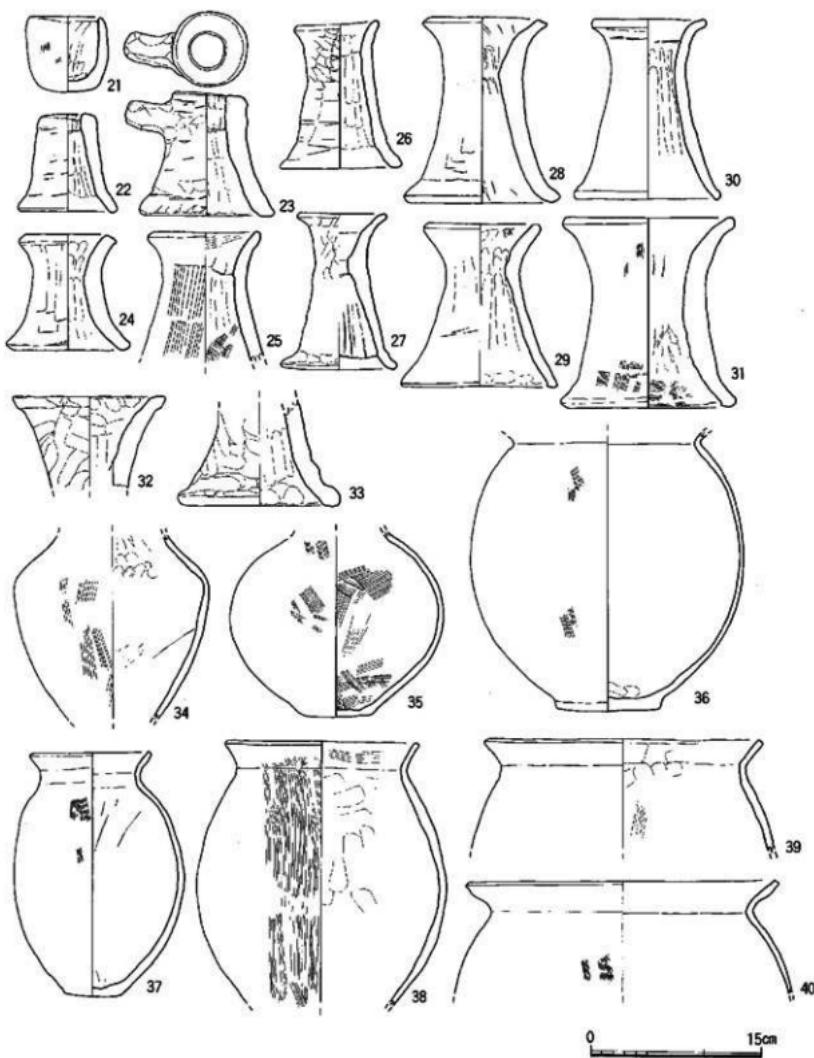


Fig. 24 SE08出土遗物实测图 1 (1/4)

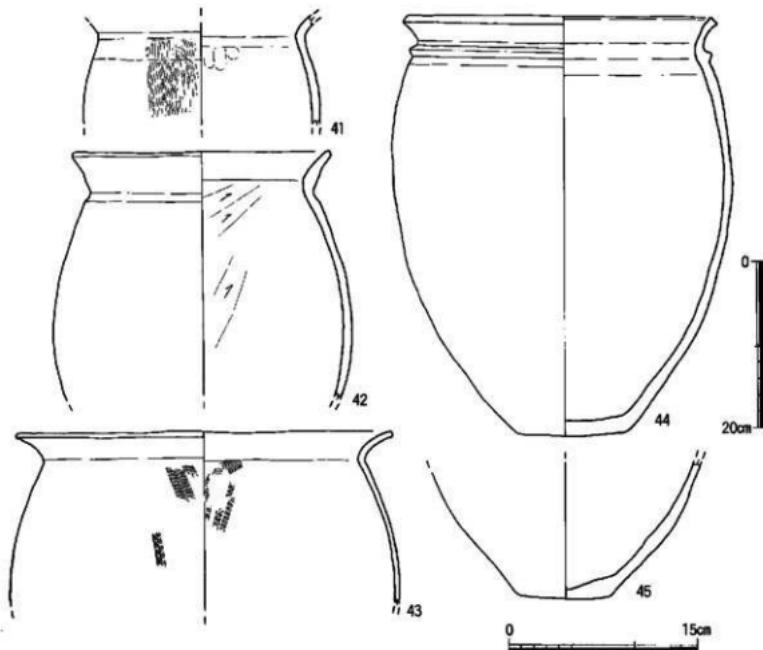


Fig. 25 SE08出土遺物実測図 2 (1/4, 1/6)

はナデ調整であるが、沈線状の刷痕が胴部から底部にかけて残る。38外
面体部に縦ハケを、内面口縁部には横ハケを明瞭に残す。体部は厚く硬
質で、火熱を受け煤が付着する。39の外面頸部下までヨコナデを施し、
ハケ目はみられない。40の口縁部は内湾して延び、端部は平坦である。
外面は器面が剥落しているが縦ハケを明瞭に残す。42は頸部と胴部の境
に段を有し、口縁部は頸部にかけて肥厚していく。外面にハケ目を残さ
ず、内面はヘラケズリ。43の口縁部は外湾しながら開き、端部は平坦に
近い。器面が剥落するが、内外面の胴部にハケ目を明瞭に残す。44は口
径35.0cm、器高50.3cmを測り、3/5程が遺存する。口縁は端部にかけて
肥厚していく、頸部には断面三角形の突帯を貼りつける。器面が剥落し
調整は不明。45の底部はわずかに丸み帯びる。外面のハケ目はほとんどナデ消される。46は埋土中位
から出土した。鉄錐状の形状をなす。片側のみ闊がみられ、錐身は幅1.2cmのまま側辺は直線的であ
る。先端の欠損の有無は不明であるが、現存は側辺から直に折れ、方頭状の形状をなす。厚みは2mm
弱で全体に反りがみられる。現存長4.5cm。

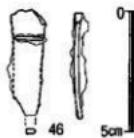


Fig. 26
SE08出土鉄器実測図 (1/2)

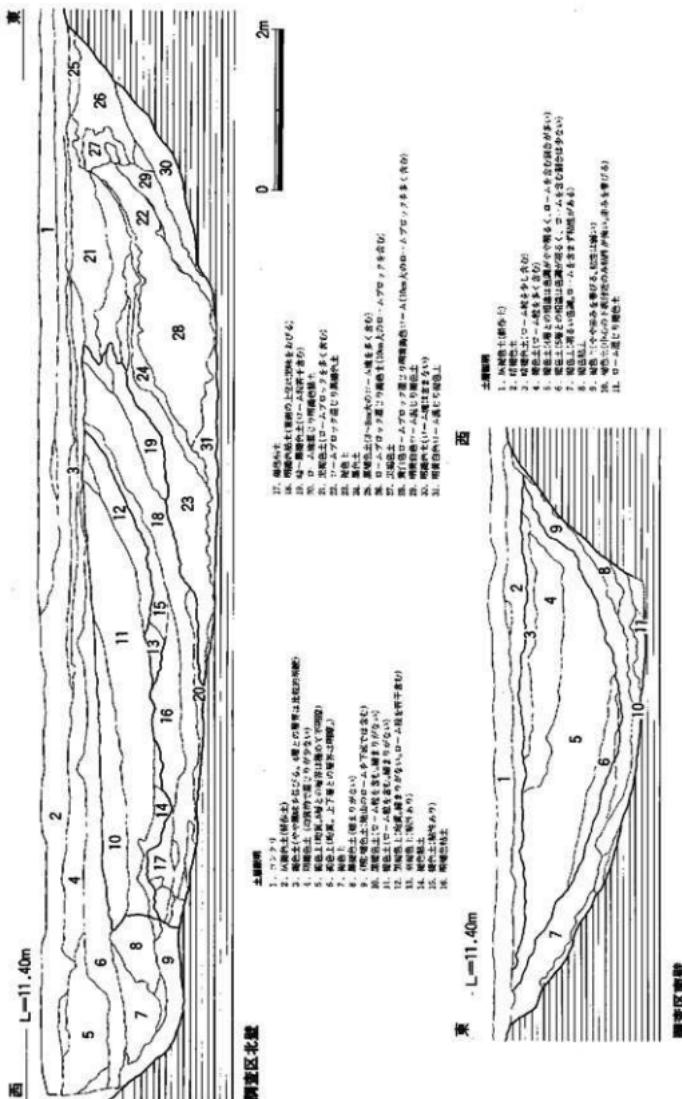


Fig. 27 SD01土層断面図(1/60)

7. 溝 (SD)

SD01

調査区の西側を湾曲しながら北側へ走行し調査区北側で大きく東へ向きを変えていく。中央部付近でSD02に切られている。調査区南側壁面の断面から幅6.8m、検出面からの深さ1.5mを測る規模が判る。東側の立ち上がりは緩やかであるのに対し、西側では急角度で直線的である。3～5層は褐色土系の埋土で層界は極めて不明瞭であり、締まりが弱い。攪拌をあまり受けず自然に埋没したものと考えられる。7層は粘性をおび、8層は褐色粘土化している。砂層の堆積は無いが、積みの時期があったものか。最下の11層はロームを含む褐色土で壁が崩落したものであろう。

調査区北側壁面では11、12層が南壁の6層までに対応する。下層では地山のローム塊を多く含み締まらない。21～29層と18層より西側の埋土に大きな差異がみられる。19層は東側の埋土に近似するが、ローム塊をあまり含まない。別遣構との切り合いかが考えられるが、SD02と切り合ひ、調査区が限られているため、確定できない。また、基底面のレベルがほぼ変わらないことや東側の立ち上がり方が18、19層と平行する等、掘り直しの可能性もある。この場合、最終的な進路は真北に近い方向をとることになる。

出土遺物

47～69は須恵器である。47の天井部は平坦で未調整のままである。45は底部付近に焼き歪みがみられ、切り離し後未調整である。50も歪みが



Fig. 28 SD01完掘状況(南から)



Fig. 29 SD01土層断面(調査区南壁面、北から)



Fig. 30 SD01土層断面(調査区北壁面、南から)

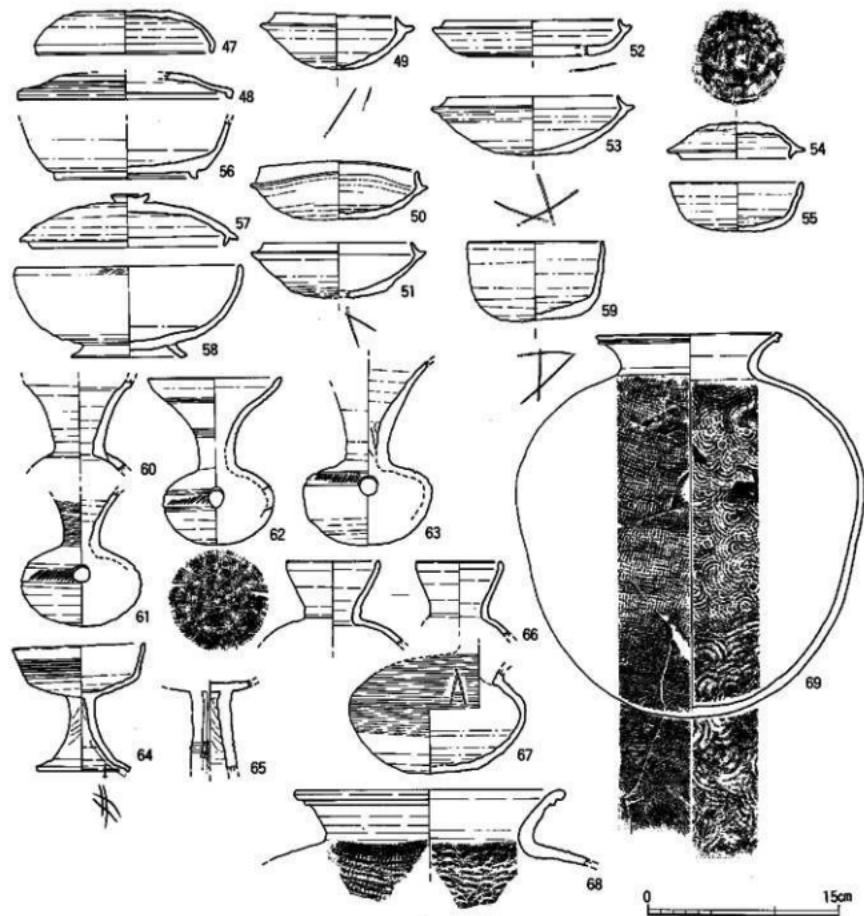


Fig. 31 SD01出土遺物実測図1(1/4)

著しく、外底部中心まで回転ヘラケズリの痕跡を明瞭に残す。51は焼成不良で明黄褐色を呈す。52の底部は平坦に近く、53は口径16.0cmを測り、外底部の回転ヘラケズリは中心まで痕跡を残す。54の天井部の回転ヘラケズリの滑りが悪い。55の外底部は丸みを持ち、回転ヘラケズリ後未調整。56の高台は底部へ屈曲する位置より内側に、直に近く貼りつける。接地面は内傾する。57の天井部2/3近くに回転ヘラケズリを施す。58の底部に回転ヘラケズリを施し、高台は外反して延び、接地面は水平である。外面の口縁端部に回転してヘラを当てたものか、斜線刻がみられる。59の外底部は回転ヘラケズリ後ナデ調整を施す。60の外面頸部は屈曲した段を有して開口していく。61の頸部にはカキメを62には2箇所に2条の沈線がみられる。62の列点文はヘラによるもので横筋がみられない。63の胴部は肩がは

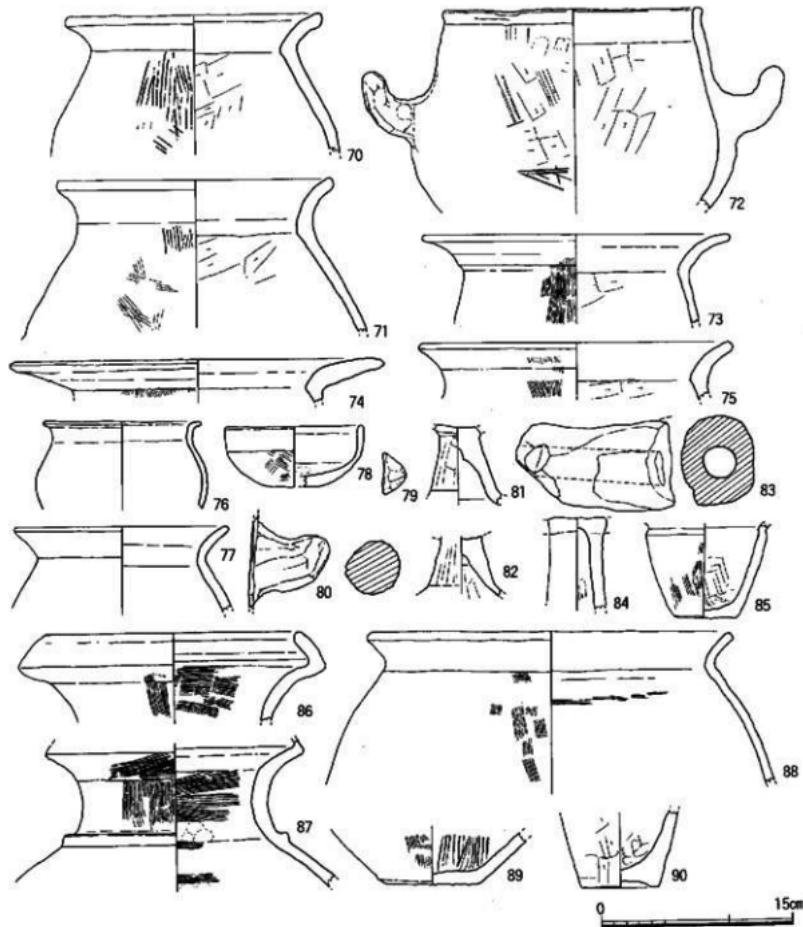


Fig. 32 SD01出土遺物実測図2(1/4)

る。64の壊部外面には5条の沈線を施す。65は2段透を3方向に刻み、中間に2条の沈線を巡らす。66は平瓶の口縁部である。67は平瓶の胴部で中位までカキメ、下位はヨコナデ、回転ヘラケズリが施される。68の胴部外面は平行タタキ後カキメ、内面に青海波文が残る。69の胴部上位は外面に木目直行タタキとカキメ、内面に同心円文、下位は外面にカキメ、内面に円弧文が残る。70は厚手で、外面に粗いハケメ、内面ヘラケズリを施す。71も器形、調整等70と同様である。72の口縁部はヨコナデによつて若干外反させる。外面胴部の上位はナデと継位の粗いハケメ、下位は横位のヘラケズリ、ハケメが残る。把手はソケット状に差し込んで接合する。73～75は外面にタテハケ、内面にヘラケズリを施す。74、75は厚手で胴部が張らない長胴形タイプである。76、77の小形壺は内面ナデ調整である。78の外

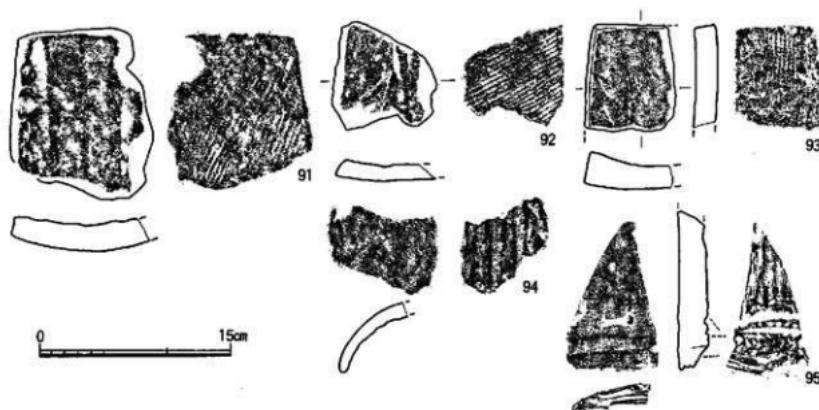


Fig. 33 SD01出土瓦実測図 (1/4)

面に若干ハケメが残るが、内外面ナデ調整。79は断面三角形の把手状の器形を呈す。83はフイゴの羽口の器形をなし、体部が湾曲している。孔内は黄褐色を呈し、火熱を受けていない。外面は部分的に火熱による色変がみられるが、あまり硬化していない。84~90は弥生時代の混入であろう。

瓦 91は側縁が遺存し凸面からのヘラケズリによる面取りがみられる。図示上は側縁から直に近く、接合面からの剥離か。内外面の摩滅が著しく調整は不明瞭であるが、凸面に平行タタキ、凹面に幅1.8cmの模骨痕が残る。明黄褐色を呈し軟質。92も側縁のみ遺存する。凸面平行タタキ、凹面に模骨痕と布目が残る。淡橙色を呈す。93は狭端部と側縁部が遺存する。内外面ともに器面の摩滅が著しく調整が不明瞭であるが、凸面に平行タタキがわずかにみられ、凹面には幅1.8cm位の模骨痕が残る。狭端部は砂粒の動きがみられず、ナデ調整か。淡橙色を呈す。94の凸面は器面が剥落しているが、ナデ調整か。凹面には竹状模骨痕と布目が残る。側縁からはみ出した粘土が凹面に被覆し、ナデ付けている。側縁は凸凹両面からヘラケズリによる面取りが施され、細まる。淡褐色を呈し軟質。95は埋土上層から出土した軒丸瓦である。瓦当の周縁のみ遺存し、接合面から剥離している。凹面に2列の凹線がみられる。図上、上位の凹線内に竹状模骨痕と布目が残り模骨を結束した痕跡の可能性がある。上位への立ち上がりは緩やかで面は荒れて、剥離していることを示す。従って、この凹線の上方から瓦当と丸瓦の接合を補強する粘土を貼りつけていたと考えられる。下位の凹線はV字形に近く模骨痕、布目ともにみられない。剥離の状況から下位の立ち上がりから瓦当と接合している事を示す。従って、この凹線は接合時の調整で生じたものか。瓦当の接合面での厚みは1.7cmを測ることになる。模骨痕はさらに下位まで残り、断面からも丸瓦部が瓦当の中位まで被覆して接合していた事が判る。丸瓦胸部凹面は竹状模骨と布目痕を残し、一部、縦位にナデ消されている。凸面はヘラ

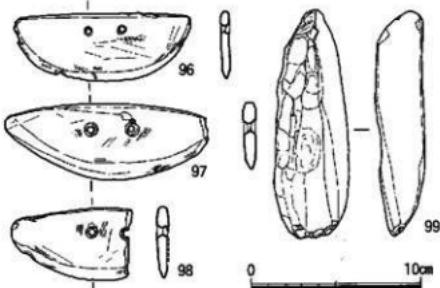


Fig. 34 SD01出土石器実測図 (1/3)

行タタキ、凹面に幅1.8cmの模骨痕が残る。明黄褐色を呈し軟質。92も側縁のみ遺存する。凸面平行タタキ、凹面に模骨痕と布目が残る。淡橙色を呈す。93は狭端部と側縁部が遺存する。内外面ともに器面の摩滅が著しく調整が不明瞭であるが、凸面に平行タタキがわずかにみられ、凹面には幅1.8cm位の模骨痕が残る。狭端部は砂粒の動きがみられず、ナデ調整か。淡橙色を呈す。94の凸面は器面が剥落しているが、ナデ調整か。凹面には竹状模骨痕と布目が残る。側縁からはみ出した粘土が凹面に被覆し、ナデ付けている。側縁は凸凹両面からヘラケズリによる面取りが施され、細まる。淡褐色を呈し軟質。95は埋土上層から出土した軒丸瓦である。瓦当の周縁のみ遺存し、接合面から剥離している。凹面に2列の凹線がみられる。図上、上位の凹線内に竹状模骨痕と布目が残り模骨を結束した痕跡の可能性がある。上位への立ち上がりは緩やかで面は荒れて、剥離していることを示す。従って、この凹線の上方から瓦当と丸瓦の接合を補強する粘土を貼りつけていたと考えられる。下位の凹線はV字形に近く模骨痕、布目ともにみられない。剥離の状況から下位の立ち上がりから瓦当と接合している事を示す。従って、この凹線は接合時の調整で生じたものか。瓦当の接合面での厚みは1.7cmを測ることになる。模骨痕はさらに下位まで残り、断面からも丸瓦部が瓦当の中位まで被覆して接合していた事が判る。丸瓦胸部凹面は竹状模骨と布目痕を残し、一部、縦位にナデ消されている。凸面はヘラ

ケズリ後、端部付近は横位のナデによる起伏がみられ、他はナデ調整により、滑らかな面を呈す。

瓦当周縁には3条の圓線が巡る。灰色～青灰色を呈し、須恵質に焼きしまる。

石器　すべて弥生時代の混入である。96～98は堆積岩製と思われる石包丁で、96は青灰色、97はアズキ色をおび、立岩産と呼ばれるものに近い。98は淡黄灰色を呈す。99は抉入片刃石斧の未製品である。図上、左側面にノミ状工具によるケズリ痕を残し、他は磨いている。抉りは浅く、縱約4cmにわたる。淡黄灰色を呈す堆積岩製である。

SD02

調査区中央部を北西方向へわずかに湾曲して走行する。北西部で最大幅4.8mを測り、南側へいくに従い、削平の為か幅を減じ調査区南壁で3.4mになる。基底面は調査区北西際で標高9.37m、南壁で9.61mを測り、若干南西側へ落ちている。断面形はロート状を呈し、土層は大きく3類に判別できる。断面形が開いた上層1～3層は混じりが少ない褐色系で、屈曲しすむレベルの4層は黒色土を挟み泥沼状の時期があった可能性がある。最下層の7層以下は断面形が一段と縮まり、壁が流水により抉られたものか、崩壊を想起させる亜な形状部分がある。地山のロームブロックを含み、人為的な埋め戻しの可能性も含め短期に堆積している。

出土遺物

100の外面は露胎で内面は釉が風化剥落している。白堆繩が復元すると6箇所ある。101は菊弁が彫りこまれた青磁碗である。緑味が強いオリーブ色を呈す。102は淡黄緑色を呈した青磁碗である。釉は薄く外側付が剥ぎ取られている以外は施釉する。内底部に白色粘土の目跡が残る。103は青磁碗で、外面に蓮弁を

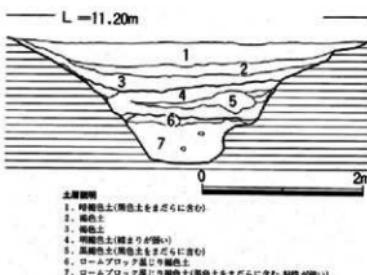


Fig. 35 SD02 土層断面図(1/60)



Fig. 36 SD02 実掘状況(南東から)



Fig. 37 SD02 土層断面(北西から)

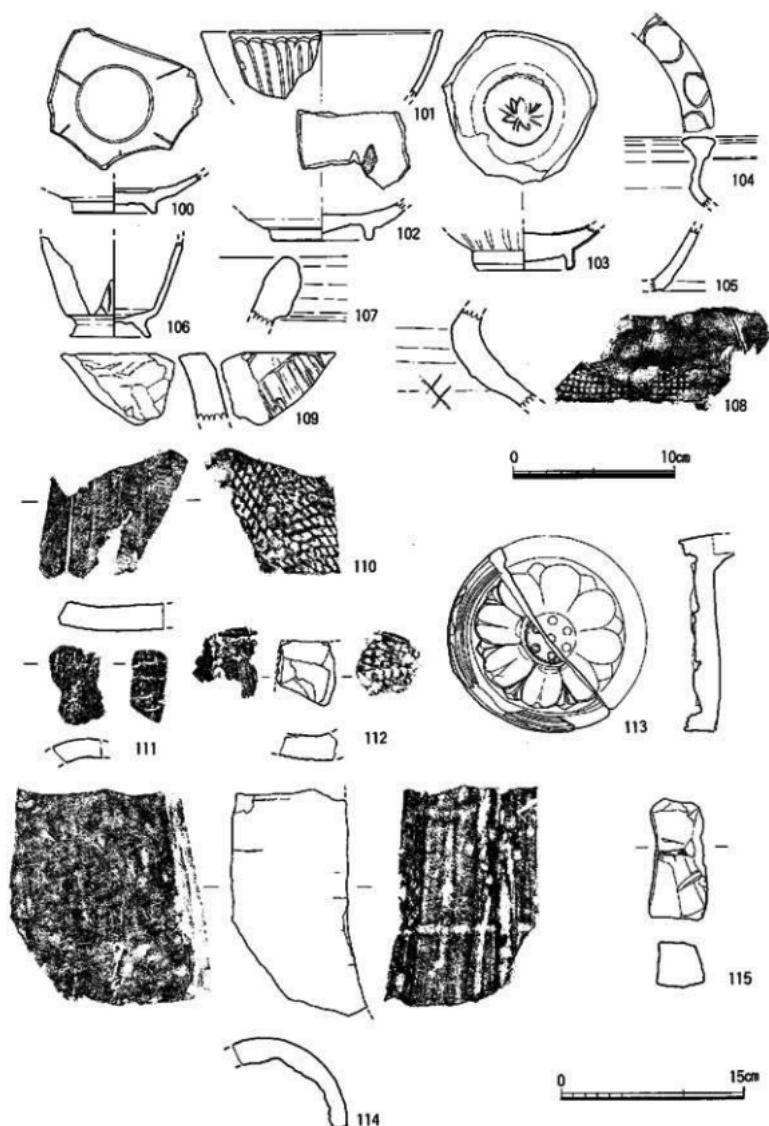


Fig. 38 SD02出土遺物実測図(100~108は1/3、110~114は1/4)

彫り、内面見込みは草花文を印刻する。外面は費付まで施釉し、内面見込みは剥ぎ取る。104, 105は同一個体の李朝陶器壺である。104の口縁部上面に円弧文が彫り刻まれる。106は須恵器である。107は佛前壺の口縁部である。108は須恵器壺で外面胴部に細かい格子タタキが残る。内面にヘラ記号を有す。淡赤褐色を呈す。

瓦 110の凸面は斜格子タタキ、

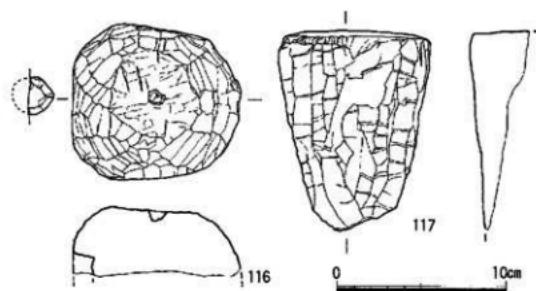


Fig. 39 SP69出土遺物実測図(1/3)

凹面は布目痕を斜位のハケメが切り、さらに縦位のナデを施し布目と模骨痕を不明瞭なものとする。側縁際に分割線と考えられる刷痕を有した断面U字形の沈線がみられる。側縁は凹凸両面からヘラケズリを施す。明灰色を呈し軟質。111の丸瓦片は凸面に細かい繩目痕がナデ消されず一部残る。凹面は布目と籠目がみられる。中世末の所産であろう。112は凸面に格子タタキ、凹面は布目痕を残し、端部付近は剥離している。青灰色を呈し、硬質。113は外区径16.4cmに復元できる百濟系單介軒丸瓦である。花弁は8弁、中房径4.1cm。蓮子は1-6に復元できる。外縁には3条の巻線が巡る。瓦当裏面はナデ調整を施すが、丸瓦が剥離した接合面にヘラケズリ状の刷痕がみられる。明灰色を呈し、軟質。114は凸面は縦位のナデが施されるが、横位に平行して1.9-2.9cm幅で沈線が巡る。粘土紐の継目の可能性もあるが、極めて細く断定できない。凹面は布目と竹状模骨痕が残り、一部縦位にナデ消されている。模骨を結束した痕がみられ、この位置より胴部が開く。側縁は凹面をヘラケズリによつて面取りしている。青灰色を呈し須恵質。115は砂岩製の砥石である。欠損する部位以外は研ぎ込まれている。淡黄褐色を呈し、粒子が細かい。仕上げ用か。

SP69

SC07内で柱穴とSD02に切られている。深さ24cmを測る。埋土内から116, 117が出土した。116, 117ともに滑石製である。116は裁断球形を呈し、図上、側面の穿孔以下はほぼ水平に剥離している。頂部は平坦であるが節理面を残す。径1.0cmの孔が穿たれている。周縁は円形に巡るノミ痕が明瞭に残る。117は円筒状のものから剥離している。上面は研磨され、側面には縦位のノミ痕が残る。

4. 小結

遺構の時期と性格

1. 壺穴住居跡と井戸

壺穴住居跡からの出土遺物は少なく、時期を決めたいが、底部が平底で、立ち上がりも直線に近く後期前半の様相を示す。SC02出土の袋状口縁に丸みを残すのも概ねこの時期と考える。しかし、SE08出土のものは時期が降る後期中頃のものを含む。従って、壺穴住居跡にもこの時期まで存続したものがあろう。隣接した那珂33次調査では同時期の壺穴住居跡が分布するが、後期初頭の井戸が検出され、遡る時期の住居跡も含まれる可能性がある。南側の第41次調査でも後期前半の住居跡が広がることが確認されている。

第20次、23次では中期初頭の環濠が検出されているが、その延長とともに集落の変遷は調査例が少なく未だ不明である。井戸も庄内系を含むもの（第23次SE37）までが混在している。興味ある課題が多いが今後に期するのみである。

2. 土壙と掘立柱建物跡

出土遺物からSK04は後期初頭、地中梁を連結させた特異なSB09は出土遺物から時期を決めたいが、古墳時代後期までの壺穴住居と主軸方向をほぼ一にする事から近接した時期と考えられる。

3. 溝

SD01 前項で記したように堀直しの可能性もある大溝である。既往の調査ではその延長は確認されていない。出土遺物のなかには第33次調査で検出された壺穴住居の営まれた6世紀後半以降のものを多く含むが、48、56が示す8世紀前半までの時期に収められると考える。瓦片の出土を見るが、SD02出土の百済系單弁軒丸瓦も近接した時期のものであろう。百済系單弁軒丸瓦は北側の第13次、32次調査でも出土し、また周辺の調査では南北、東西に走行する溝も確認されているが、その区画を把握するには至っていない。

SD02 出土遺物から15世紀以降の時期が与えられる。那珂遺跡群の調査では、上述の7世紀後半から8世紀後半の溝のほか、中世末の大溝が検出された例が増えている。延長が完結された例は無いが、市内有田遺跡群でもみられるような館跡が見いだされるであろう。

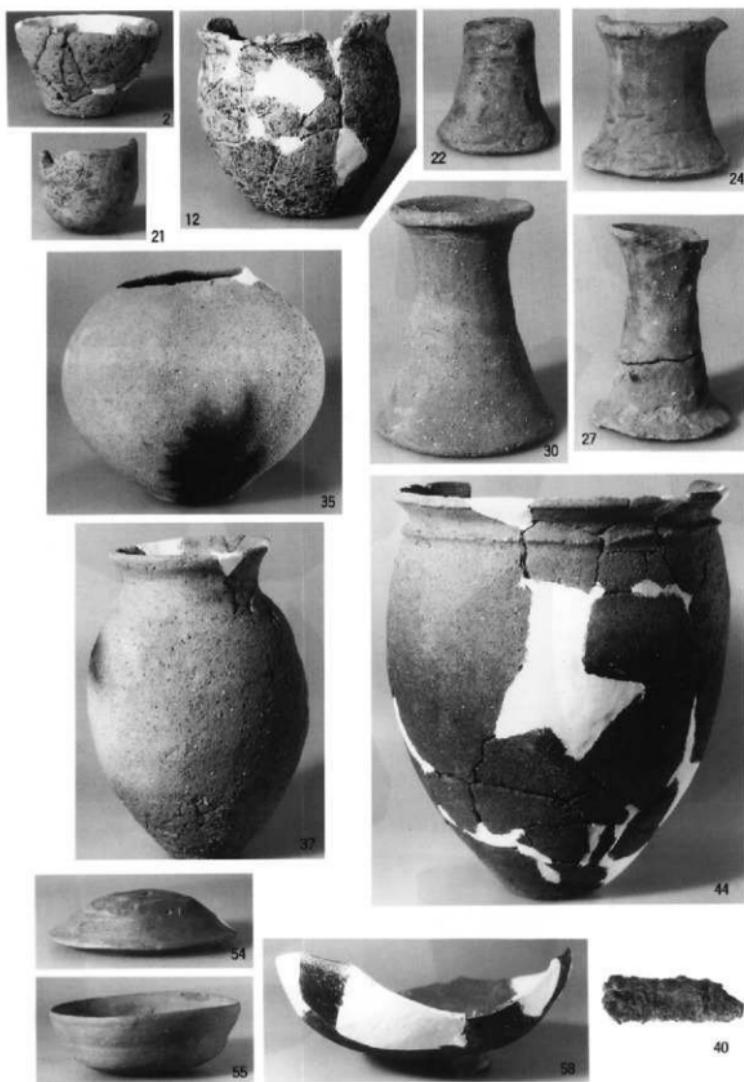


Fig. 40 那珂26次出土遺物 1

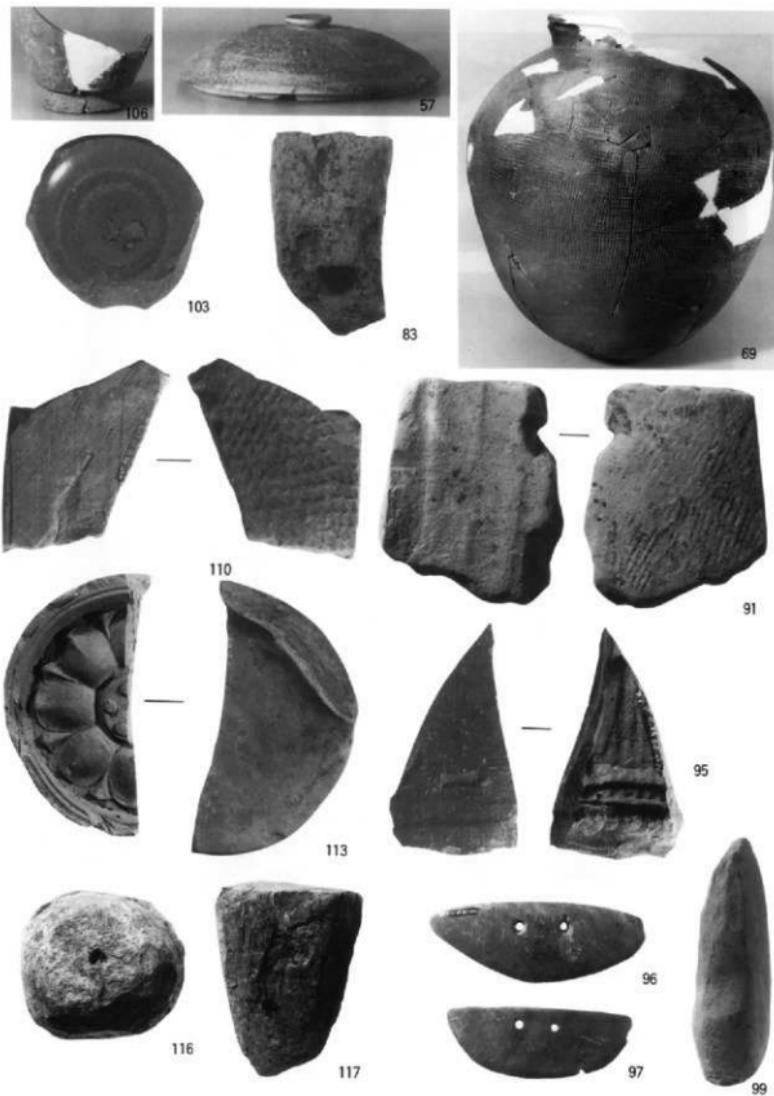


Fig. 41 那珂26次出土遺物 2

麦野 A 遺跡第 3 次調査報告

第3章 麦野A遺跡第3次調査の記録

1. 調査の概要

1993年(平成5年)5月11日、武内善朗氏より、埋蔵文化財事前審査願いが提出され、同年5月21日に試掘調査を行った。調査前の現況は宅地である。申請地の北側で約100cmの表土・包含層を除去すると地山の鳥栖ローム層となり、その面で井戸、柱穴等を検出した。南側は現地表から150cmで地山の八女粘土となり、旧地形は南側に傾斜している。この成果を基に地権者と協議を持ったが、現状保存、設計変更是困難であったため、記録保存のための発掘調査を行うこととなった。

本調査地点は麦野A遺跡群の中央に位置する。調査前の標高は約15mを測る。調査は申請地の北側を中心に、約100cmの表土を除去した後の鳥栖ローム層を遺構面として行った。

遺構は申請地北側で奈良時代～平安時代の井戸2基、柱穴等を検出した。申請地南側は黒色粘質土の包含層が認められたが、遺構は検出できなかった。遺物は井戸から、土師器、須恵器、綠釉陶器等が出土した。

調査は1993年(平成5年)6月16日から6月24日まで行った。

2. 遺跡の位置と環境

麦野A遺跡群は福岡平野の南東部に当たり、遺跡群が立地する台地は春日丘陵から延びてくる洪積台地で、沖積面に埋没したり、浸食によって八つ手状を呈する。台地上は谷によって隔てられた地形的な縦まり毎に遺跡が分けられている。これまで、周辺の井相田C遺跡群、南八幡遺跡群、麦野A～C遺跡群で奈良～平安時代を中心とした集落が検出されている。また、台地の縁辺の冲積地では三筑遺跡で弥生時代～中世の時期の水田、水路、井堰等が検出されている。





Fig. 43 麦野A遺跡群と周辺遺跡(1/6000)

3. 調査の記録

1) 井戸(SE)

今回の調査では2基の井戸を検出した。いずれも素掘りの井戸である。時期はSE-01は9世紀代、SE-02は10世紀代に位置づけられる。

SE-01(Fig. 45)

調査区西側に位置する。平面形は円形を呈し、直径3.2~3.3mを測る。底面は八女粘土層を更に掘り下げている。深さ約250cm、底面の標高9.9mを測る。埋土は暗褐色粘質土が堆積する。遺物は埋土から土師器、須恵器、黒色土器等が出土した。遺物には時期幅があるが、本井戸は9世紀代に位置づけられる。

出土遺物(1~8)

1~4は須恵器である。1は壊身である。口縁内面には短い受け部がつく。底部はヘラ切り未調整である。底部にはヘラ記号がある。2は長脚二段透かしの高壺である。壺部と脚裾部は欠損している。3は壺蓋である。天井部は偏平の宝珠つまみがつく。口縁は下垂する。器高2.6cm、口径15.6cmを測る。4は高台付の壺である。体部は直線的に立ち上がる。底部の外寄りに断面台形の高台がつく。器高6.8cm、口径15.2cm、底径10.8cmを測る。5は土師器壺である。底部は回転ヘラ切りを施す。器高3.8cm、口径13.3cm、底径7.0cmを測る。6は土師器高壺の壺部で、裾は大きく開く。壺部は欠損している。7、8は黒色土器A類の碗である。7は底部に低い高台がつく。内面は丁寧なヘラミガキを施す。口径

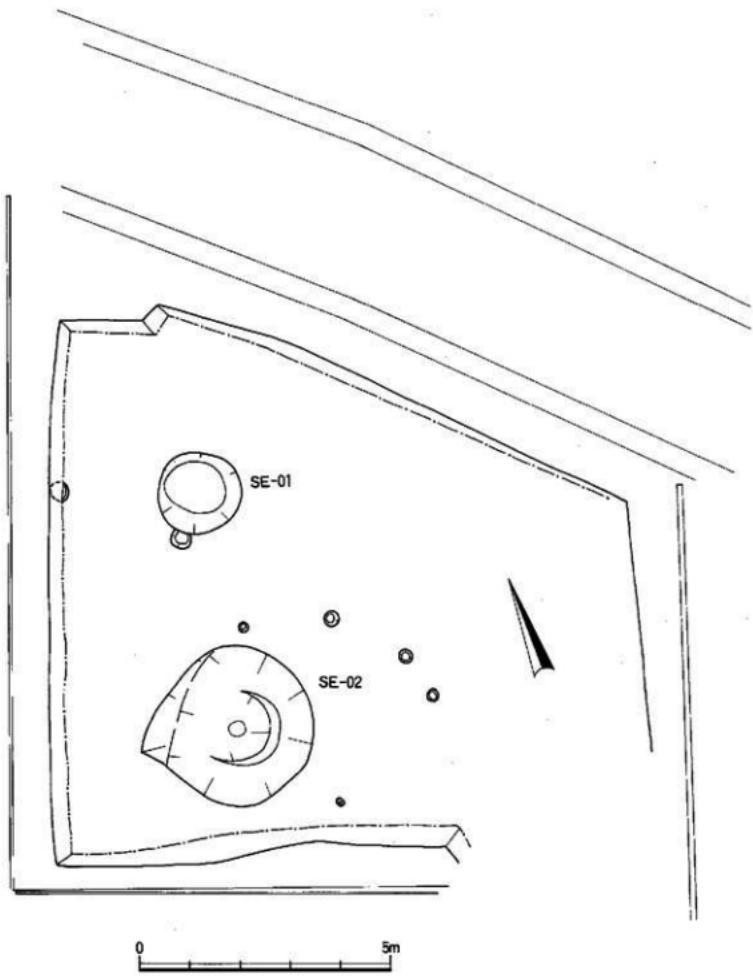


Fig. 44 麦野A遺跡群第3次調査造構配図(1/100)

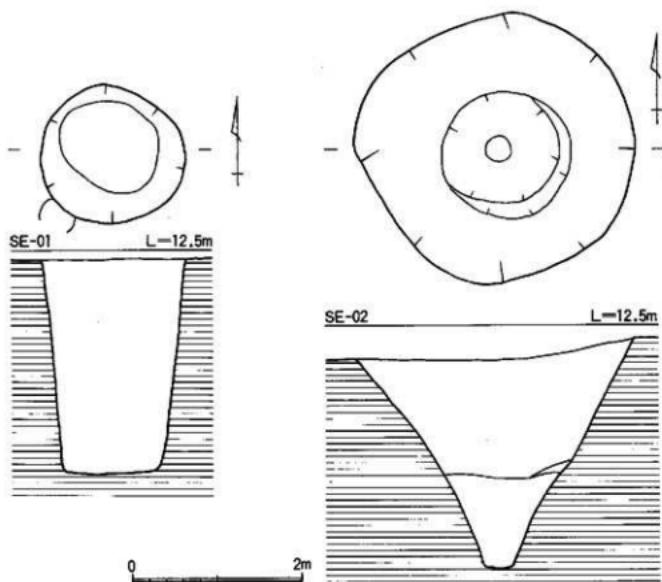


Fig. 45 SE-001、002遺構実測図(1/60)

13.9cmを測る。8は底部に細く高い高台がつく。外面はヘラ状工具による沈線、内面はヘラミガキを施す。底部はヘラ切り後ナデである。器高7.7cm、口径15.7cm、底径8.6cmを測る。

SE-02(Fig. 45)

調査区西側に位置する。平面形は円形を呈し、直径6.1~6.2mを測る。底面は八女粘土層を更に掘り下げている。深さ約270cm、底面の標高9.7mを測る。断面形はすり鉢状を呈し、底には井筒が据えられていたと考えられる。埋土は暗褐色粘質土が堆積する。遺物は埋土から土師器、須恵器、黒色土器、綠釉陶器等が出土した。遺物には時期幅があるが、本井戸は10世紀代に位置づけられる。

出土遺物(9~34)

9は綠釉陶器の椀である。底部には断面方形の高台を削りだす。高台の内側は胎体になる。胎色は黄緑色を呈する。胎上は須恵質で、灰白色を呈する。10~12は土師器壺である。底部はヘラ切りで、11、12は板状圧痕がつく。10、12は器高3.8cm、1.8cm、口径12.4cm、12.4cm、底径8.0cm、8.0cmを測る。13、14は土師器椀である。底部にはハの字形に開く高い高台がつく。15~17は黒色土器A類の椀である。底部にはハの字形に開く高台がつく。18~26は土師器壺若しくは瓶である。口縁はくの字形に折れる。外面はハケメ、内面はヘラケズリを施す。口径22.8cm~34.0cmを測る。27~31は瓶である。27~29は把手、30、31は底部である。32は平瓦である。凸面は縄目叩き、凹面は布目を残す。33は丸瓦である。凸面は縄目叩き、凹面は布目を残す。34は土製円盤である。径9.6~10.8cm、厚さ1.4cmを測る。

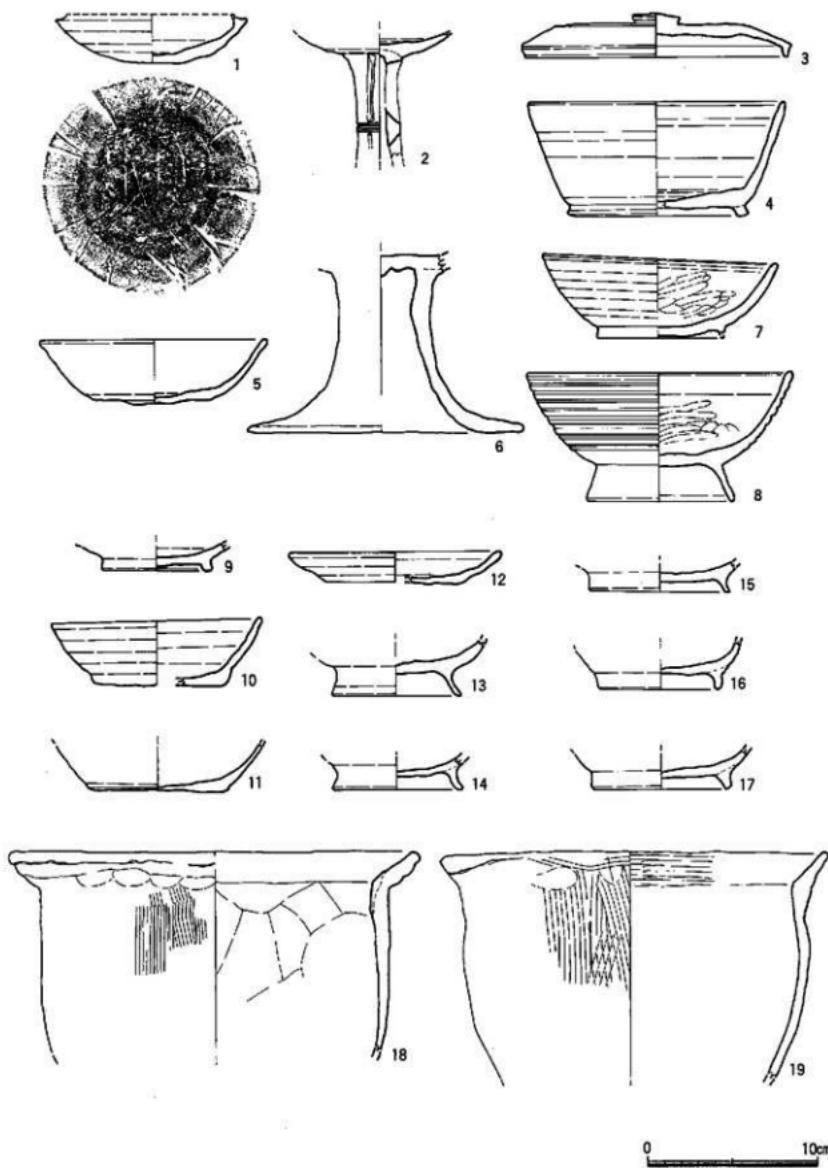
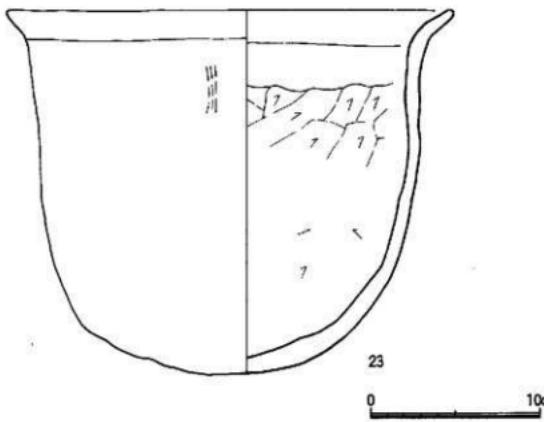
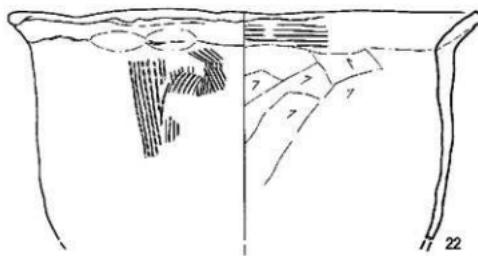
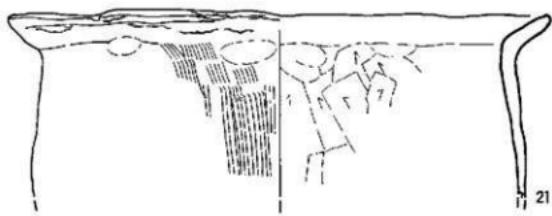
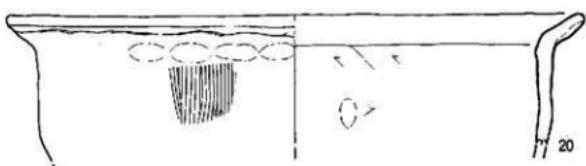


Fig. 46 SE-001 及 U002 出土遺物実測図 (1/3)



0 10cm

Fig. 47 SE-002出土遺物実測図(2)(1/3)

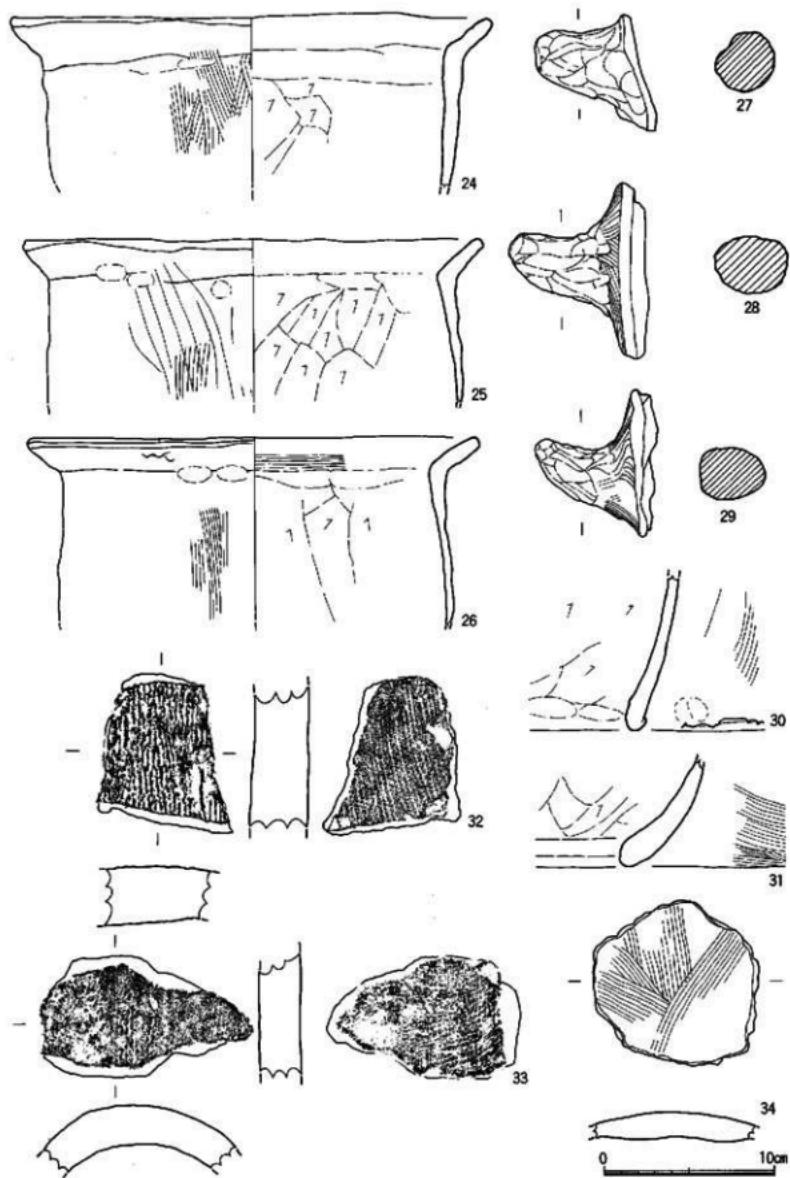


Fig. 46 SE-001 及 UF002 出土遺物實測圖 (1/3)



Fig. 49 麦野 A 遺跡群第 3 次調査地点全景(東から)

4. 小結

今回の調査では平安時代の井戸を検出した。井戸は素掘りで、SE-02は底に井筒が掘えられていたと考えられる。遺物は土師器、須恵器、黒色土器等の他、綠釉陶器、瓦等が出土した。本調査区の西側では地形は傾斜しており、遺跡の中心は東南側にあると考えられる。今回の調査では範囲が狭く、遺跡の性格等は不明確だが、綠釉陶器や瓦等が出土しており、一般集落とは異なる様相が伺える。今後の周辺調査に期待される。

雜餉隈遺跡第2～4次調查報告

第4章 雜餉隈遺跡第2次調査の記録

1. 調査の概要

1993年(平成5年)5月20日、関道房氏より、埋蔵文化財事前審査願いが提出され、同年7月6日に試掘調査を行った。調査前の現況は宅地で、道路面より約120cmほど高い位置にある。約60cmの表土・包含層を除去すると地山の鳥栖ローム層となり、その面で竪穴住居跡、土坑、柱穴等を検出した。この成果を基に地権者、施工者と協議を重ねたが、現状保存、設計変更は困難であったため、記録保存のための発掘調査を行うこととなった。

本調査地点は雑餉隈遺跡群の東南側に位置する。後述する第3次調査地点の南側に隣接する。周辺は大半が大きく地形の改変を受けているため、旧地形はほとんど残っていない。調査前の標高は約20mを測る。調査は約60cmの表土を除去した後の鳥栖ローム層を造営面として行った。

遺構は弥生時代中期土坑、奈良時代の竪穴住居跡、土坑等を検出した。遺物は各遺構から、弥生土器、土器師、須恵器、刀子等が出土した。

調査は1993年(平成5年)7月19日から8月6日まで行った。

2. 位置と環境

雑餉隈遺跡群は福岡平野の東南部に位置し、春日市、大野城市との市境にあたる。遺跡群が立地する台地は春日丘陵から延びてくる洪積台地で、沖積面に埋没したり、浸食によって台地の先端は八つ手状を呈する。丘陵は市街化のため、旧地形はかなり改変されている。これまで、本遺跡群の北側の井相田C遺跡群、南八幡遺跡群、麦野A~C遺跡群で奈良~平安時代を中心とした集落が検出されている。本遺跡群は調査例も少なく、遺跡の全容は不明な点が多い。

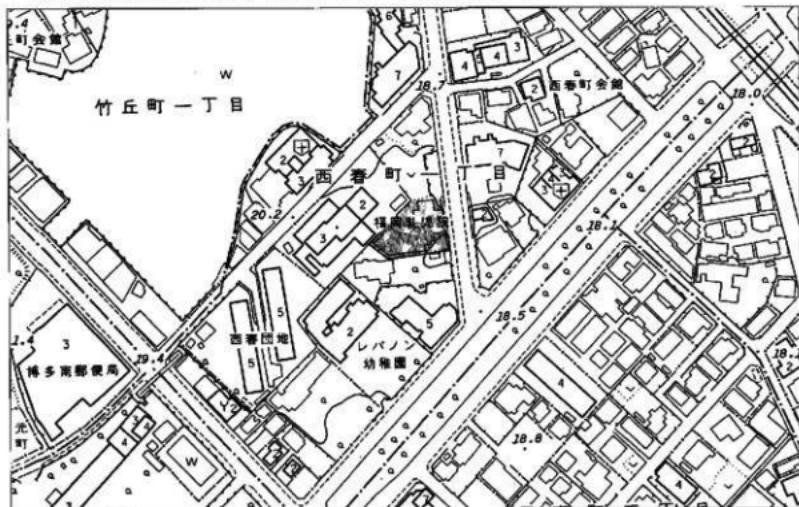


Fig. 50 雜餉隈遺跡群第2次調査地点位置図(1/2500)

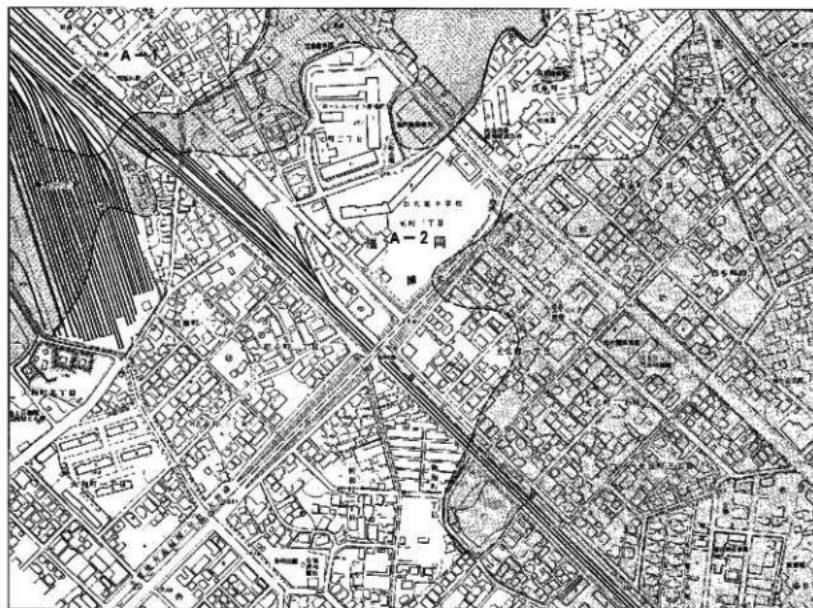


Fig. 51 雜物置遺跡群と周辺遺跡 (1/6000)

3. 調査の記録

2) 壁穴住居跡(SC)

今回の調査では6基の壁穴住居跡を検出した。そのうち、SC-005、006は攪乱をうけ、SC-008、011は調査区外側に遺構が広がるため、規模は不明である。遺構の時期はいずれも奈良時代に位置づけられるものである。

SC-003 (Fig. 54)

調査区西側に位置する。住居の主軸はN-15°-Eの方位をとる。平面形は正な方形を呈し、南北長3.2m、東西長2.9m、深さ35cmを測る。壁際には幅15cmの壁溝が巡る。主柱穴は不明である。北壁には竈が取りつく。煙道が住居の外側に延びる。北側の壁際には白色粘土が広がっているが、竈は完全に潰れており、袖部が残る程度である。内法は35×80cmを測る。焚口には炭と焼土が見られる。遺物は埋土から須恵器、土師器等が出土した。時期は奈良時代に位置づけられると考える。

出土遺物(1-6)

1～3は須恵器である。1は壺蓋である。天井部は丸く、偏平な宝珠つまみがつく。口縁はわずかに下垂する。口径12.1cmを測る。2、3は皿である。体部はわずかに外反気味に立ち上がる。底部はへラ切り後ナデを施す。法量は器高1.7cm、2.3cm、口径17.0cm、18.3cmを測る。4～6は土師器壺である。口縁は緩やかに外反する。胴部は寸胴である。外面はハケメ、内面はヘラケズリを施す。口径29.6cm、29.2cm、24.0cmを測る。

SC-004 (Fig. 54)

調査区中央に位置する。住居の主軸はN-1°-Eの方位をとる。平面形は方形を呈し、南北長3.55m、東西長3.65m、深さ25cmを測る。壁際には幅15cmの壁溝が巡る。主柱穴は不明である。南側の一部が搅乱のため、削平をうけている。北壁には竈が取りつく。竈は掛け口が潰れており、袖部が残る程度である。袖部は白色粘土で構築される。焚口には炭と焼土が見られる。内法は50×55cmを測る。遺物は埋土から須恵器、土師器等が出土した。時期は奈良時代に位置づけられると考える。

出土遺物(7、8)

7は高台付の壺である。底部の内側寄りに低い高台がつく。体部は直線的に立ち上がる。器高3.7cm、口径14.5cm、底径10.2cmを測る。8は土師器壺である。縁やかに外反する。胸部は寸胴である。外面はハケメ、内面はヘラケズリを施す。口径24.0cmを測る。

SC-005(Fig. 54)

調査区西側に位置する。住居の主軸はN-1°-Eの方位をとる。平面形は方形を呈し、南北長3.6m、東西長4.0m、深さ50cmを測る。壁際には幅20cmの壁溝が巡る。主柱穴は不明である。南側半分は削平をうけている。北壁には竈が取りつく。竈は中央よりやや東側に位置する。竈は掛け口が潰れており、袖部が残る程度である。袖部は白色粘土で構築される。焚口には炭と焼土が見られる。内法は50×90cmを測る。遺物は埋土から須恵器、土師器、刀子等が出土した。時期は奈良時代に位置づけられると考える。

出土遺物(9~14)

9~11は須恵器である。9は壺蓋である。天井部は欠損している。口縁はわずかに下垂する。口径17.2cmを測る。10は高台付の壺である。底部には低い高台がつく。体部は直線的に立ち上がる。器高3.7cm、口径11.0cm、底径6.1cmを測る。11は皿である。体部は直線的に立ち上がる。底部はヘラ切り後ナデを施す。内外面に墨が付着しており、転用硯と考えられる。法量は器高2.6cm、口径16.4cmを測る。12は土師器皿である。底部の切離しはヘラ切りである。器高2.6cm、口径16.6cmを測る。13は



Fig. 52 錦糸町跡群第2次、3次調査遺構配置図(1/300)

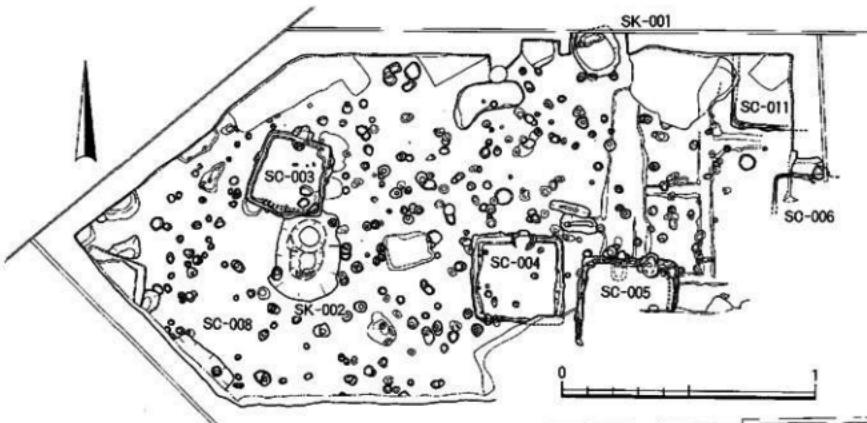


Fig. 53 雄納隈遺跡群第2次調査遺構配置図(1/200)

土師器壺である。口縁は緩やかに外反する。外面はナデ、内面はヘラケズリを施す。口径28.8cmを測る。14は鉄製の刀子である。長さ16.2cm、幅1.5cm、厚さ0.5cmを測る。

SC-006 (Fig. 54)

調査区西側に位置する。住居の主軸はN-0°-Eの方位をとる。大半が削平をうけており、全体の1/4が残存する程度である。平面形は方形を呈し、南北長1.3m、東西長2.0mが残存する。深さは30cmを測る。壁際には幅10cmの壁溝が巡る。主柱穴は不明である。北壁には竈が取りつく。竈は遺存状況は良く、掛け口が残存している。竈は白色粘土で構築される。焚口には炭と焼土が見られる。内法は50×80cm、高さ30cmを測る。遺物は埋土から須恵器、土師器等が出土した。時期は奈良時代に位置づけられると考える。

出土遺物(15)

15は須恵器の壺蓋である。天井部は欠損している。口縁は下垂する。口径20.0cmを測る。

SC-008 (Fig. 53)

調査区西南に位置し、遺構の南側は調査区外に延びる。平面形は方形を呈する。他の住居と異なり、東側に45°程ふれている。住居以外の遺構の可能性もある。南北長1.0m以上、東西長2.9mを測る。遺物は埋土から須恵器、土師器等が出土した。時期は奈良時代に位置づけられると考える。

SC-011 (Fig. 54)

調査区北側に位置し、遺構の北側は調査区外に延びる。住居の主軸はN-0°-Eの方位をとる。平面形は方形を呈する。南北長1.5m以上、東西長2.5m以上を測る。深さは10cmが残存する。壁際には幅10cmの壁溝が巡る。主柱穴は不明である。遺物は埋土から須恵器、土師器等が出土した。時期は奈良時代に位置づけられると考える。

2) 土坑(SK)

土坑は4基検出した。ここでは主な土坑について述べていく。

SK-001 (Fig. 56)

調査区南東に位置する。平面形は橢円形を呈する。長さ194cm以上、幅190cm、深さ40cmを測る。断

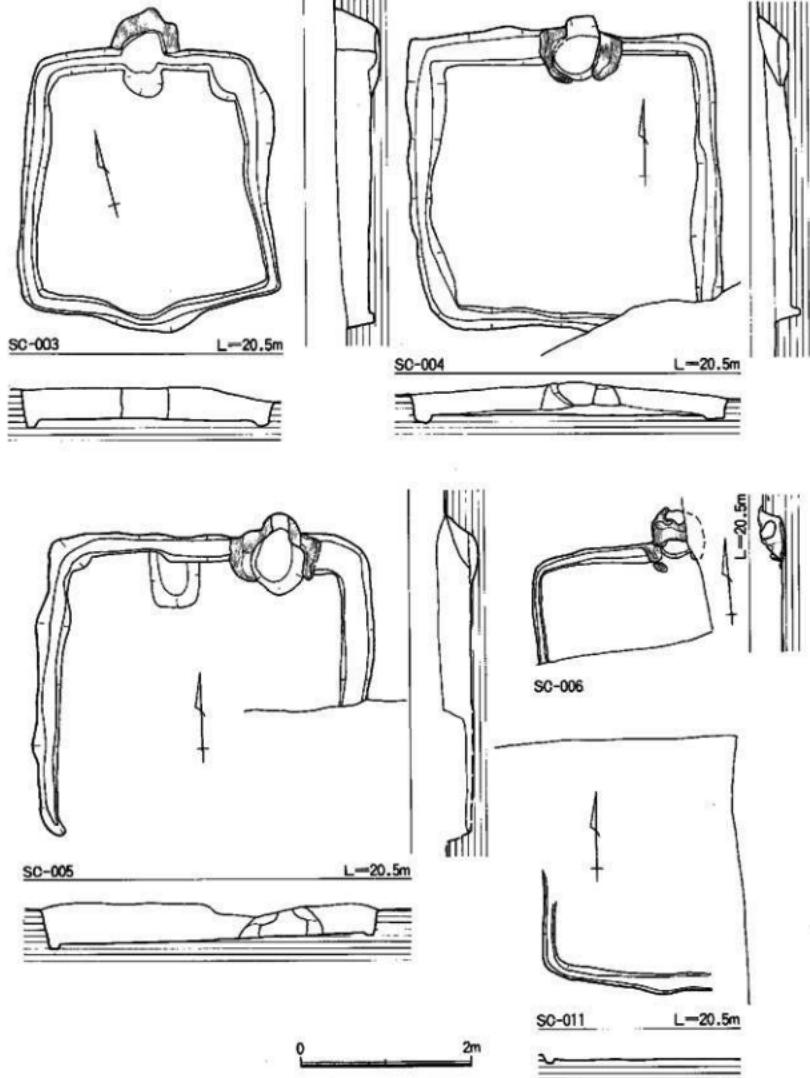


Fig. 54 SC-003~006, 011造構実測図(1/60)

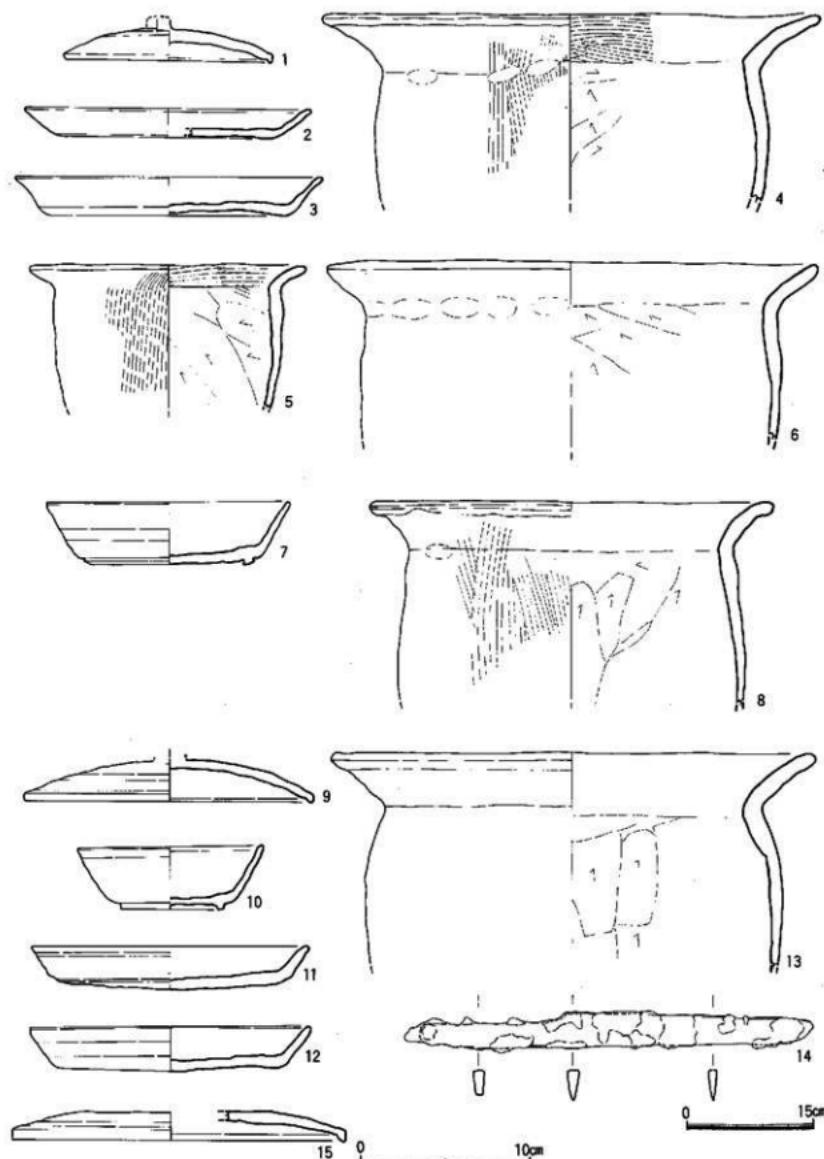


Fig. 55 SC-003~006出土遺物実測図(1/3, 1/2)

面は逆台形を呈する。埋土は暗褐色粘質土で、遺物は須恵器、土師器等が出土した。時期は奈良時代に位置づけられると考える。

出土遺物(16~26)

16~24は須恵器である。16、17は壺蓋である。16は天井部に偏平の宝珠つまみがつく。口縁端部はわずかに肥厚する。器高2.0cm、口径15.8cmを測る。17は天井部は欠損している。口縁端部はわずかに肥厚する。口径14.8cmを測る。18~22は高台付の壺である。底部には低い高台がつく。体部は直線的若しくはやや内湾気味に立ち上がる。器高3.5cm~4.0cm、口径12.8cm~13.5cm、底径7.6cm~10.0cmを測る。23は皿である。体部はやや外反気味に立ち上がる。底部はハラ切り後ナデである。器高2.2cm、口径18.5cmを測る。24は壺底部である。底部は平底である。底径15.0cmを測る。25は土師器である。口縁はくの字形に折れる。外面はハケメ、内面はハラケヅリを施す。口径29.5cmを測る。26は玉縁式の丸瓦である。凸面は繩目叩き後ナデ、凹面は布日が残る。

SK-002(Fig. 56)

調査区西側に位置する。SC-003に切られる。平面形は梢円形を呈し、中央より北側を更に掘り下げている。長さ298cm、幅244cm、深さ150cmを測る。埋土は暗褐色粘質土で、埋土から弥生土器等が出土した。時期は弥生時代中期後半に位置づけられると考える。

出土遺物(27、28)

27、28は壺である。接合はしないが、同一個体と考える。口頸部は緩やかに外反し、口縁端部はつまみ上げる。頸部には3条の断面台形の突帯がつく。底部は平底である。口径19.6cmを測る。

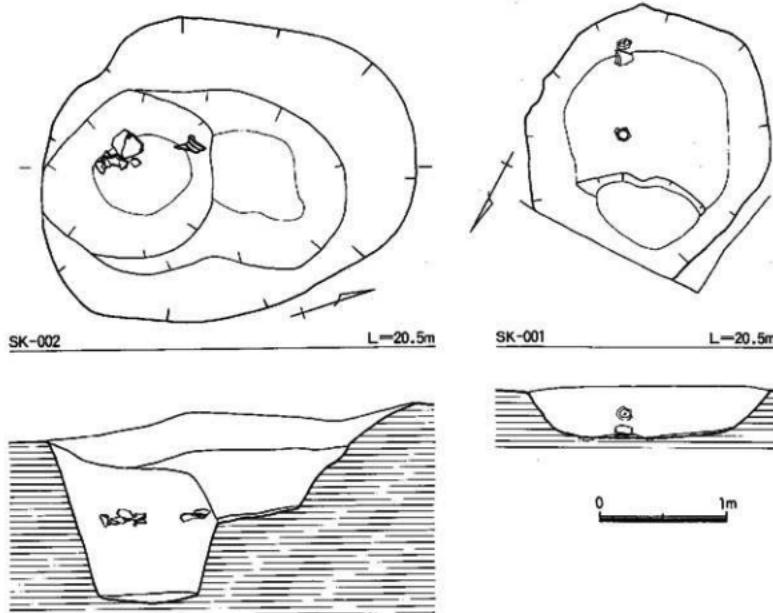


Fig. 56 SK-001、002遺構変遷図(1/40)

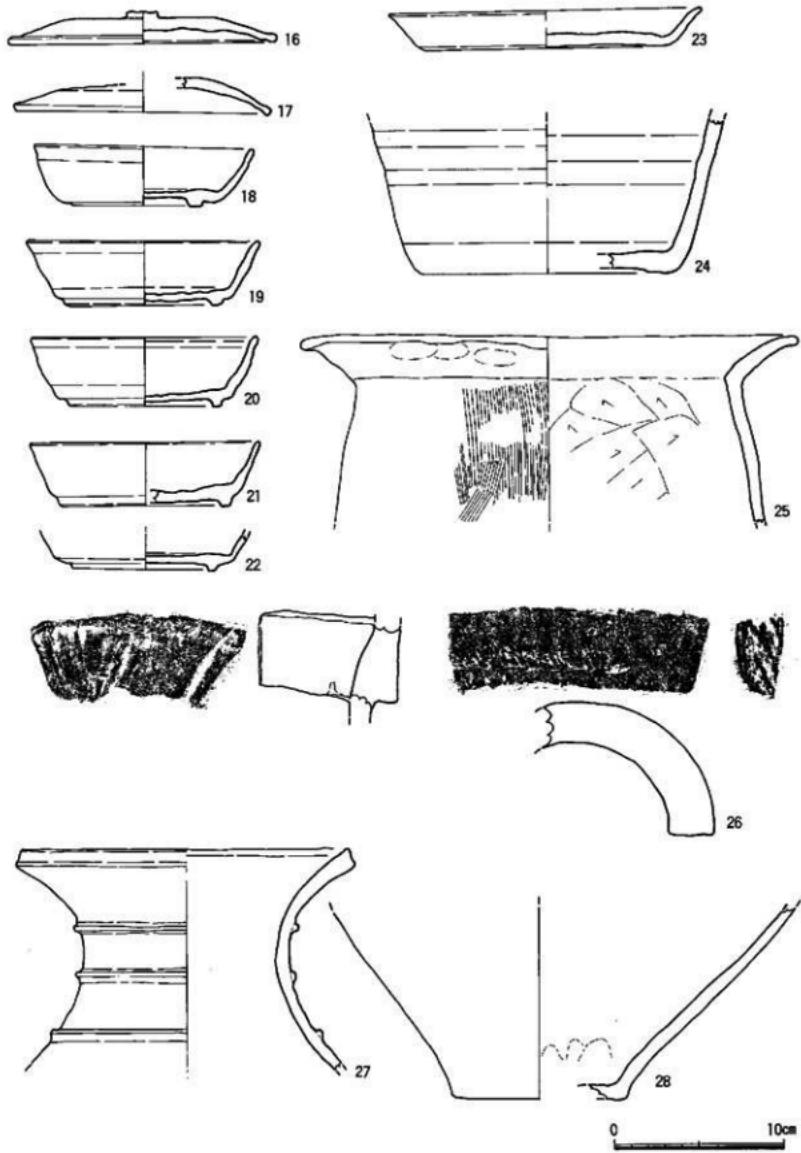


Fig. 57 SK-001、002出土遺物実測図(1/3)

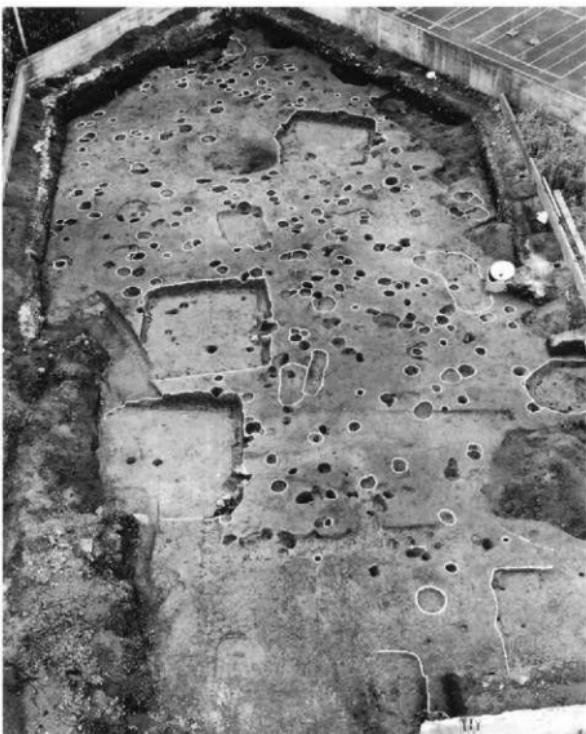


Fig. 58 雜鈴隈遺跡群第2次調査地点全景(東から)

4. 小結

今回の調査では弥生時代から奈良時代の竪穴住居跡、土坑等を検出した。奈良時代の竪穴住居跡は方形プランで、1辺2.9~4.0mを測る。内部には作り付けの竈がある。住居の主軸はほぼ磁北をとるもの(SC-004, 005, 006, 011)とやや東にふれるもの(SC-003)がある。時期差と考えられる。北側に隣接する第3次調査でも同時期の竪穴住居跡が検出されている。遺物は須恵器、土師器、瓦等が出土した。瓦の出土量は5点程で、瓦葺きの建物等は本調査区では予想されない。

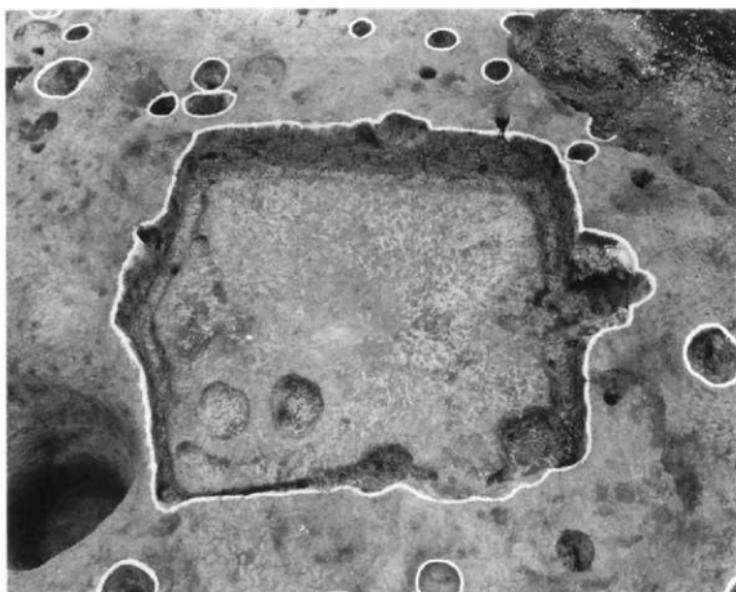
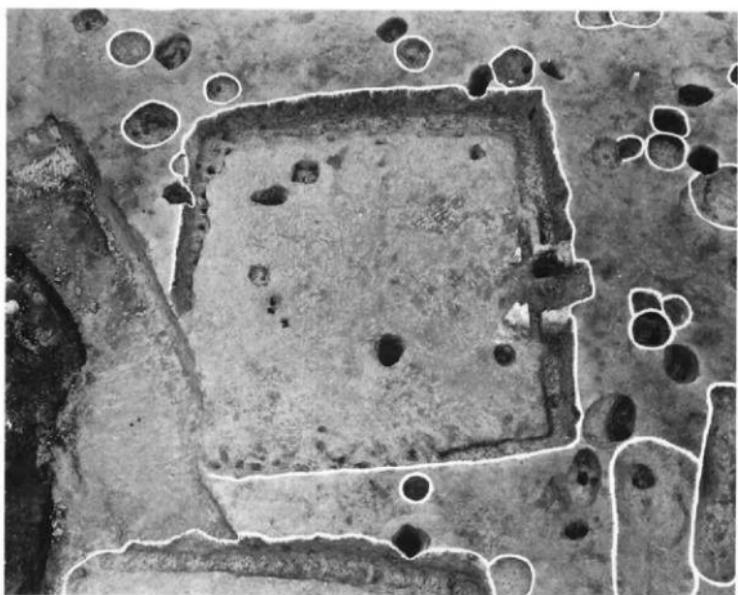


Fig. 59 SC-003完掘(東から)

Fig. 60 SC-003竪(南から)



61



62

Fig. 61 SC-004完掘(東から)

Fig. 62 SC-004礫(南から)



63



64

Fig. 63 SC-005完掘(東から)

Fig. 64 SC-005竪(南から)



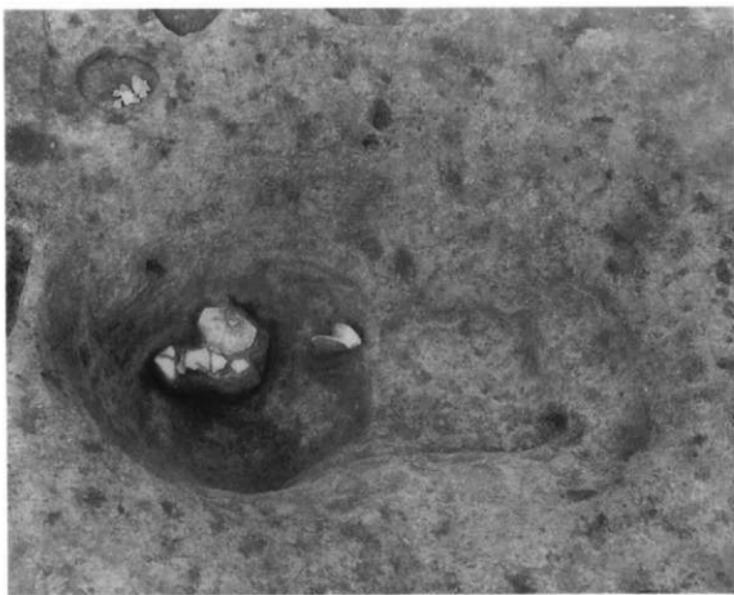
65



66

Fig. 65 SC-006完掘(南から)

Fig. 66 SC-006電(西から)



67



68

Fig. 67 SK-002完掘(南から)

Fig. 68 SK-001完掘(西から)

第5章 雜餉隈遺跡第3次調査の記録

1. 調査の概要

1993年(平成5年)8月26日、本調査地点での、埋蔵文化財事前審査願いが提出され、同年9月28日に試掘調査を行った。調査前の現況は宅地で、道路面より約120cmほど高い位置にある。約60cmの表土・包含層を除去すると地山の鳥栖ローム層となり、その面で堅穴住居跡、土坑・柱穴等を検出した。南側の隣接地では第3次調査が行われており、試掘でもほぼ同様の結果が得られた。その後、申請地は売買され、中川宗敏氏より住宅建築の計画が埋蔵文化財課に寄せられた。この計画について地権者、施工者と協議を行ったが、現状保存、設計変更は困難であったため、記録保存のための発掘調査を行うこととなった。

本調査地点は雑餉隈遺跡群の東南側に位置し、第2次調査地点の北側に隣接する。調査前の標高は約20mを測る。調査は約60cmの表土を除去した後の鳥栖ローム層を造構面として行った。

造構は奈良時代の堅穴住居跡、柱穴等を検出した。遺物は各造構から、弥生土器、土師器、須恵器、刀子等が出土した。

調査は1993年(平成5年)11月18日から12月4日まで行った。

2. 調査の記録

1) 堅穴住居跡(SC)

今回の調査では4基の堅穴住居跡を検出した。そのうち、SC-003は調査区外側に造構が広がるため、規模は不明である。造構の時期はいずれも奈良時代に位置づけられるものである。

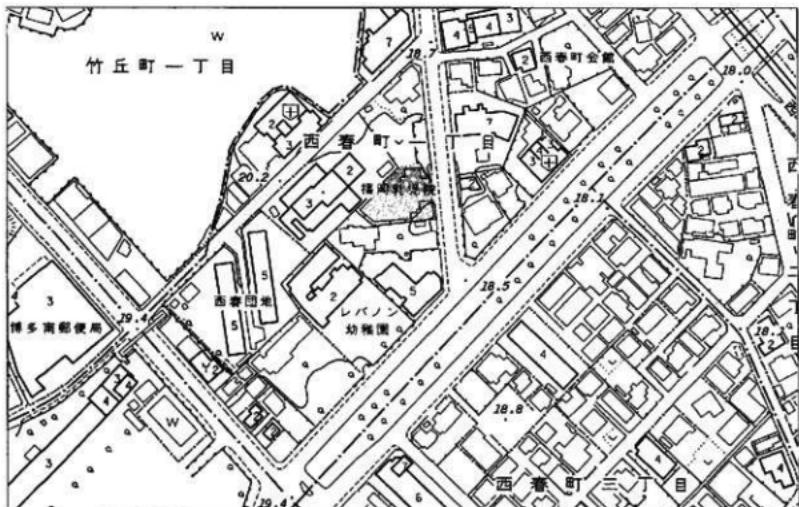


Fig. 69 雜餉隈遺跡群第3次調査地点位置図(1/2500)

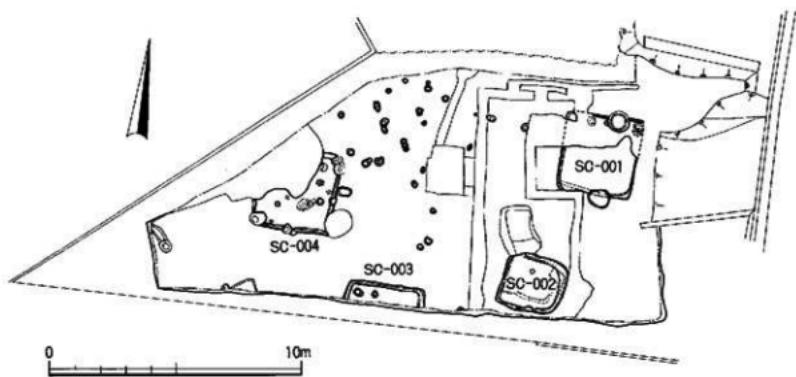


Fig. 70 雜鈴隈遺跡群第3次調査遺構配置図(1/200)

調査区東側に位置する。住居の主軸はN-6°-Eの方位をとる。平面形は方形を呈し、南北長3.2m、東西長3.05m、深さ5cmを測る。壁際には幅10cmの壁溝が巡る。主柱穴は不明である。遺物は埋土から須恵器、土師器等が出土した。また、北東隅のピットから須恵器の蓋、皿が出土した。時期は奈良時代に位置づけられると考える。

出土遺物(1~4)

1~4は須恵器である。1、2は壺蓋で、天井部は丸みを帯びており、やや偏平な宝珠つまみがつく。口縁はわずかに下垂する。2は天井部に「益」の墨書きがある。法量は器高3.2cm、2.6cm、口径14.6cm、15.0cmを測る。3は高台付の壺である。体部は欠損している。底部にはハの字形に開く高台がつく。底径9.4cmを測る。4は皿である。体部はやや外反気味に立ち上がる。底部はヘラ切り後ナデを施す。器高1.6cm、口径13.6cmを測る。

SC-002(Fig. 71)

調査区東側に位置する。住居の主軸はN-15°-Eの方位をとる。平面形は歪な方形を呈し、南北長2.3m、東西長2.5m、深さ10cmを測る。壁際には幅20cmの壁溝が巡る。主柱穴は不明である。遺物は埋土から須恵器、土師器、刀子等が出土した。時期は奈良時代に位置づけられると考える。

出土遺物(5、6)

5は高台付の壺である。体部は直線的に立ち上がる。底部には低い高台がつく。器高4.0cm、口径14.0cmを測る。6は鉄製の刀子である。茎は曲がっている。残存長12.8cm、幅1.1cm、厚さ0.4cmを測る。

SC-003(Fig. 71)

調査区西側に位置し、遺構の南側は調査区外に延びる。平面形は方形を呈する。東西長3.3m、南北長0.9m以上を測る。深さは15cmが残存する。壁際には幅20cmの壁溝が巡る。主柱穴は不明である。遺物は埋土から須恵器、土師器等が出土した。時期は奈良時代に位置づけられると考える。

SC-004(Fig. 71)

調査区西側に位置し、遺構の北側は削平をうけている。住居の主軸はN-2°-Eの方位をとる。平面形は方形を呈する。南北長3.2m、東西長3.3mを測る。深さは5cmが残存する。主柱穴は不明である。遺物は埋土から須恵器、土師器等が出土した。時期は奈良時代に位置づけられると考える。

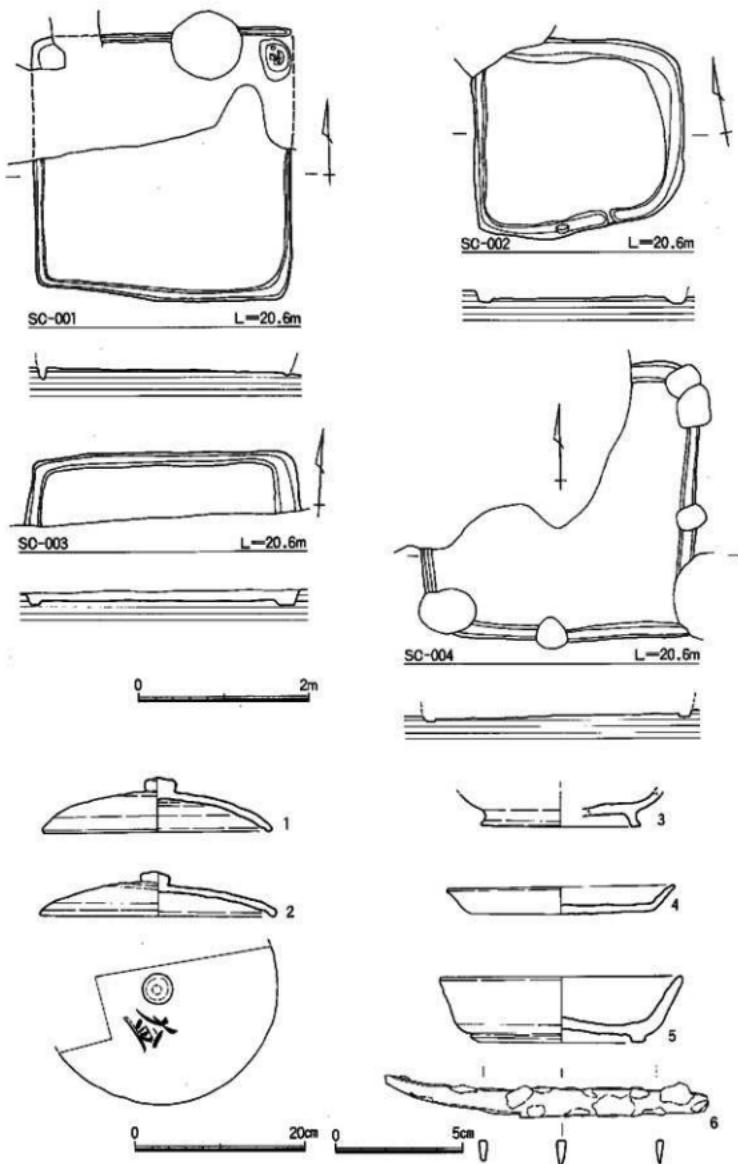


Fig. 71 SC-001~004遺構実測図(1/60)及び遺物実測図(1/3、1/2)

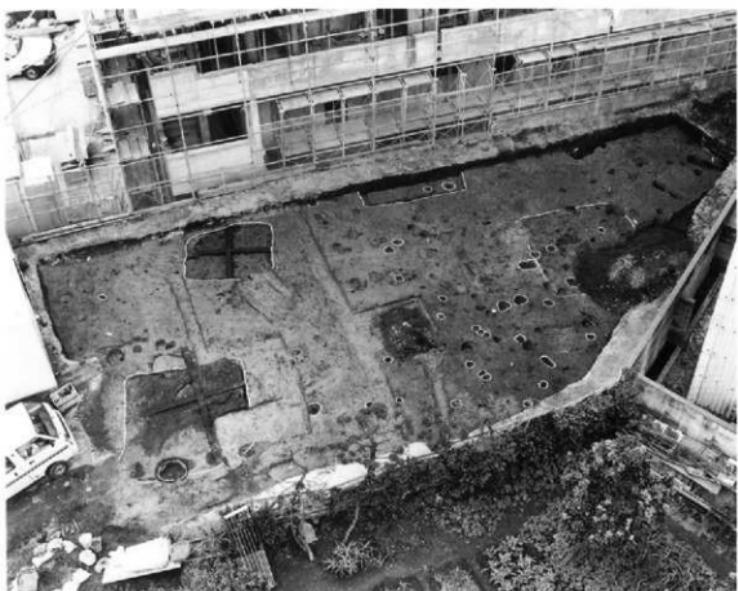


Fig. 72 錦糸遺跡群第3次調査地点全景(北から)

3. 小結

今回の調査では4軒の竪穴住居跡を検出した。時期はいずれも奈良時代に位置づけられる。先述した第2次調査分を合わせると、10軒の住居となる。両者で検出した竪穴住居跡を見ていくと、大きく2種類に分けられる。一つは1辺2.9~4.0mを測り、壁際に竈が取りつくものである。もう一方は1辺2.3~3.3mと前者に比べるとひとまわり小さく、住居内には作り付けの竈の無いものである。前者の住居はほとんどが第2次調査で、後者は第3次調査で検出されたものである。また、両者の住居の主軸方位を見ていくと、ほぼ磁北方向のもの(第2次SC-004、005、006、011、第3次SC-002、003、004)と東にやや触れるもの(第2次SC-003、第3次SC-001)がある。竈付きのものは居住用、無いものは作業用若しくは倉庫的な性格を持つものと考えられ、それぞれが組合わざって集落を構成していたと考えられる。今回の調査は範囲が狭いため、遺構の広がり、性格等は不明確な点が多い。今後の周辺の調査に期待される。



73



74

Fig. 73 SC-001完掘(南から)

Fig. 74 SC-001遺物出土状況(南から)



75



76

Fig. 75 SC-002発掘(北から)

Fig. 76 SC-002遺物出土状況(北から)



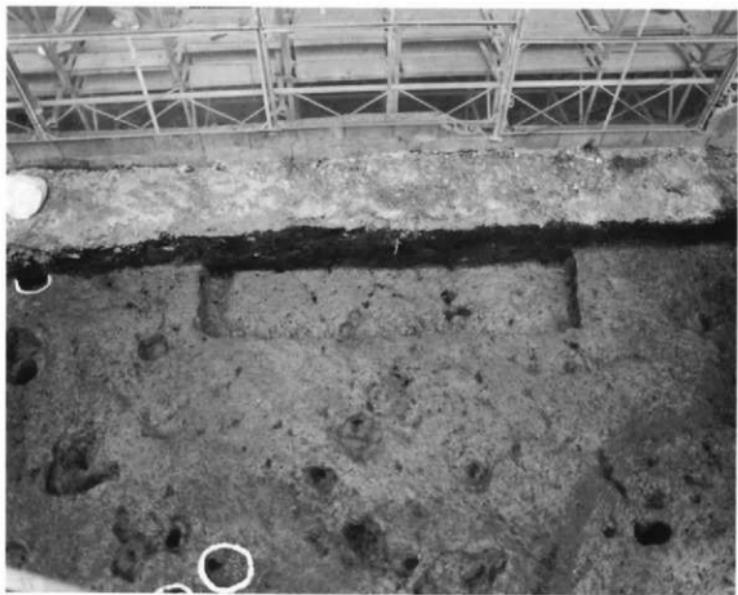
77



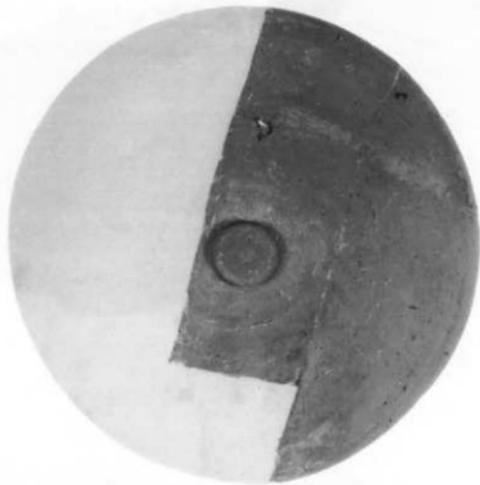
78

Fig. 77 SC-003、004完掘(北から)

Fig. 78 SC-003完掘(東から)



79



80

Fig. 79 SC-004完掘(北から)

Fig. 80 SC-001出土墨書き器

第6章 雜餉隈遺跡第4次調査の記録

1. 調査の概要

1993年(平成5年)8月30日、ポリマー産業有限会社より、埋蔵文化財事前審査願いが提出され、同年9月28日に試掘調査を行った。調査前の現況は宅地である。約40cmの表土・包含層を除去すると地山の鳥栖ローム層となり、その面で土坑、柱穴等を検出した。この成果を基に地権者と協議を行ったが、現状保存、設計変更は困難であったため、記録保存のための発掘調査を行うこととなった。

本調査地点は雑餉隈遺跡群の西南側に位置する。本調査地点の北側では平成6年度、市営住宅建設に伴う発掘調査が行われ、奈良時代を中心とした集落遺跡が確認されている。調査前の標高は約22.7mを測る。調査は約40cmの表土を除去した後の鳥栖ローム層を遺構面として行った。

遺構は奈良時代の掘建柱建物、土坑等を検出した。遺物は各遺構から、土師器、須恵器、瓦等が出土した。

調査は1994年(平成6年)3月9日から3月24日まで行った。

2. 調査の記録

1) 挖立柱建物(SB)

SB-003(Fig. 83)

調査区西側に位置する建物で、 2×1 間分を検出した。SB-004を切る。遺構は調査区北側に更に延びる。主軸方位はN-17°-Eを測る。柱穴は一辺30~40cmの不整形方形プランで、深さ40cmが残存する。規模は梁行の全長3.8m、桁行は不明である。遺物は土師器、須恵器が少量が出土した。時期は特定

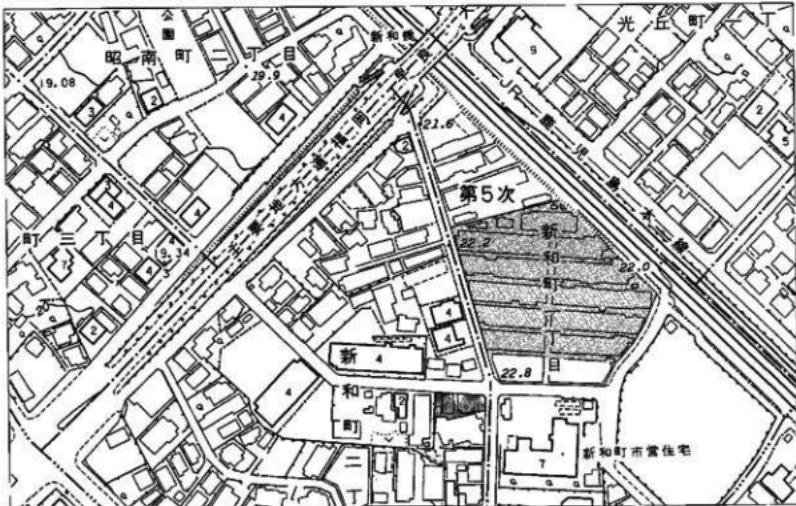


Fig. 81 雜餉隈遺跡群第4次調査地点位置図(1/2500)

できないが、奈良時代に位置づけられると考える。

SB-004 (Fig. 83)

調査区西側に位置する建物で、 2×2 間分を検出した。SB-003に切られる。遺構は調査区北側に更に延びる。主軸方位はN-2°-Eを測る。柱穴は一辺30~40cmの不整方形プランで、深さ40cmが残存する。規模は棟行の全長3.8m、桁行の柱間は2.2mとなる。遺物は土師器、須恵器が少量が出土した。時期は特定できないが、奈良時代に位置づけられると考える。

2) 土坑(SK)

SK-001 (Fig. 84)

調査区西側に位置する。平面形は不整椭円形を呈する。断面形は船底形を呈する。長さ375cm、幅230cm、深さ45cmを測る。埋土は暗褐色粘質土で、埋土から土師器、須恵器、瓦等が出土した。時期は奈良時代に位置づけられると考える。

出土遺物(1~10)

1~8は須恵器である。1は壺蓋で、天井部に偏半の宝珠つまみがつく。口縁は短く下垂する。器高2.2cm、口径16.8cmを測る。2、3は壺蓋で、天井部中央は欠損している。天井部には回転ヘラケズリを施す。口縁は下垂する。口径15.9cm、16.4cmを測る。4、5は高台付の壺である。底部には断面台形の高台がつく。体部は直線的に立ち上がる。器高4.0cm、4.2cm、口径13.8cm、14.0cm、底径8.8cm、

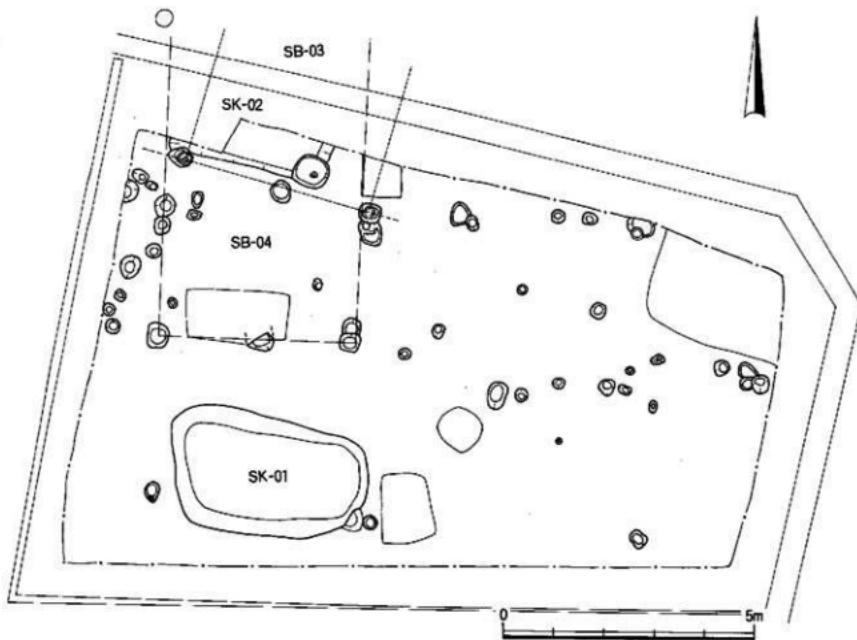


Fig. 82 錐鉄腰遺跡群第4調査遺構配置図(1/100)

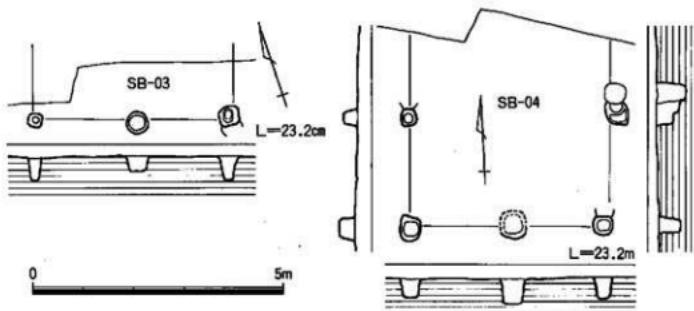


Fig. 83 SB-003, 004遺構実測図(1/100)

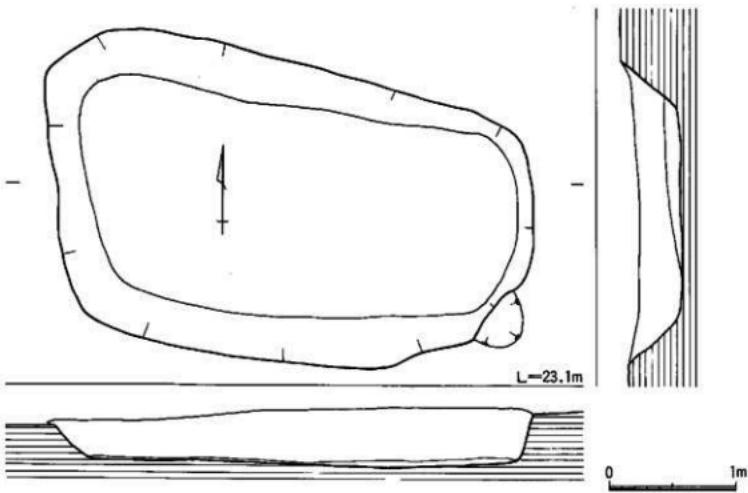


Fig. 84 SK-001遺構実測図(1/40)

9.8cmを測る。6は壺の蓋である。天井部は欠損している。口縁は天井部との境でおれて直線的にのびる。口縁端部を外側につまみ出す。口径14.5cmを測る。7は盤である。体部は直線的にのびる。底部は回転ヘラケズリを施す。口径21.5cmを測る。8は高壺の壊部である。脚部はラッパ形を呈し、裾端部は面取りして、端部内側が接地する。底径9.8cmを測る。9は土師器の鉢の把手である。10は平瓦で、側面、端面は欠損している。凸面は織目叩き、凹面は布目が残る。

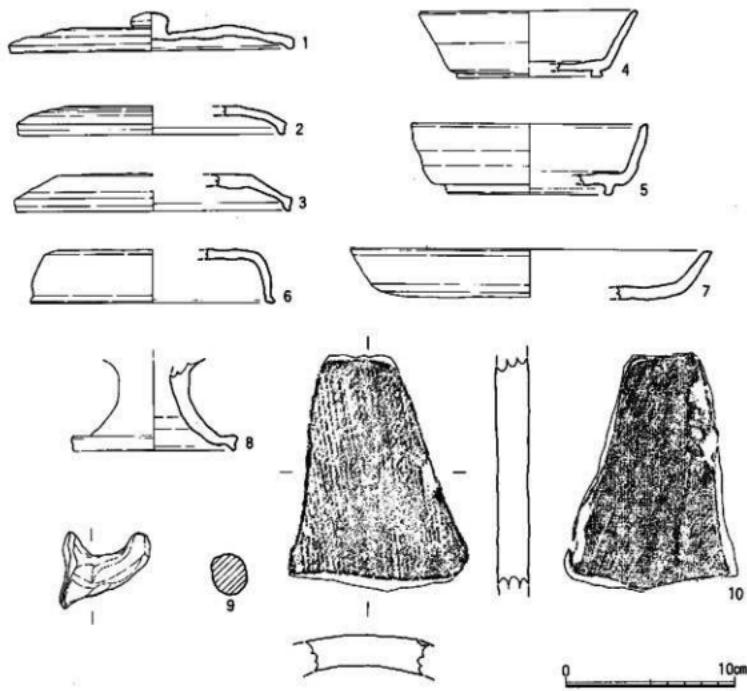


Fig. 85 SK-001遺物実測図(1/3)

3. 小結

今回の調査では奈良時代の掘立柱建物、土坑等を検出した。調査区が狭いため、建物は2棟とも調査区外に広がり、全容は把握できなかった。土坑は1基検出し、須恵器、土師器等が少量出土した。遺構の密度は薄かった。平成6年度に本調査区の北側で行われた第5次調査では当該期の竪穴住居跡、土坑等の他、弥生時代の弥生時代の竪穴住居跡、貯蔵穴等が多数検出されている。また、更に北側の第6次調査でも奈良時代の竪穴住居跡、土坑等が検出されている。本調査区の周辺地域はこれまで調査例が少なく、遺跡の様相が不明確であった。しかし、今回の調査に端を発して周辺は奈良時代を中心とした集落跡であることが分かった。遺跡の性格については今後の整理、報告を待ちたい。



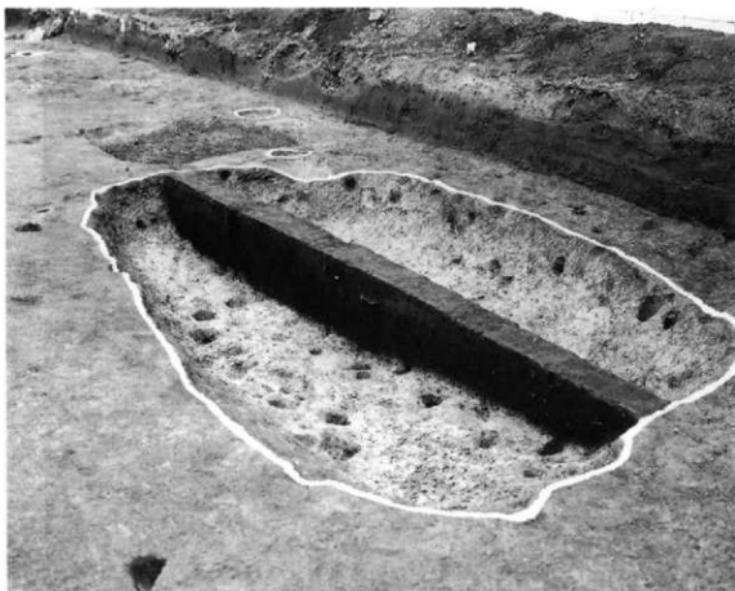
86



87

Fig. 86 雜鈎限遺跡群第4次調査地点全景(東から)

Fig. 87 雜鈎限遺跡群第4次調査地点全景(東から)



88



89

Fig. 88 SK-001完掘(西から)

Fig. 89 雜鈉隈遺跡群第5次調査地点全景(西から)

中　南　部（4）

— 郡河遺跡群第26号、支野A遺跡群第3号、
桂納野遺跡群第2～4次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第409集

1995年3月31日

発 行 福岡市教育委員会

〒810 福岡市中央区天神1丁目8の1

印 刷 アド印刷株式会社

福岡市博多区博多駅南5丁目21番

28号